

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

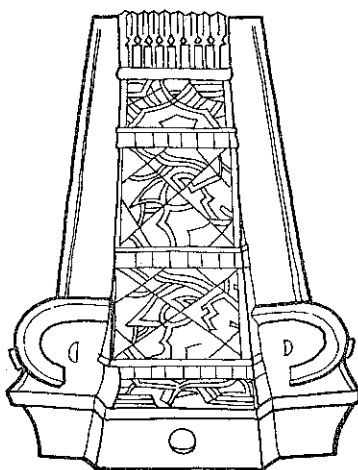
第 1 集

1982

宇治市教育委員会

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

## 第 1 集



庵寺山古墳出土の鞆形埴輪

1982

宇治市教育委員会



鐵釉四耳壺(宇治市街遺跡)

## はじめに

近年、開発がますます大規模化の傾向をたどっていますが、開発に伴って実施される埋蔵文化財の発掘調査も増加の一途にあり、毎日の新聞紙上で発掘調査に関連した記事を探すのには苦勞しないほどであります。当宇治市におきましても例外ではありません。

こういったなかで、昭和52年以降宇治市教育委員会および発掘調査会が実施しました調査件数は17件であります。このたび7件の調査結果をとりまとめ「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第1集」として発刊することになりました。7件の調査結果のうち2件は、本市の公共事業、他の5件は民間の開発事業等に伴うものであります。事業者の方々のご理解とご協力を得て調査ができましたことに対し深く感謝の意を表します。

本書が多くの方々目にふれ、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくうえの一助になることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの調査ならびに整理作業等に献身的にご尽力いただいた方々や、本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係機関、関係各位に対し衷心より感謝の意を表するものであります。

昭和57年11月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

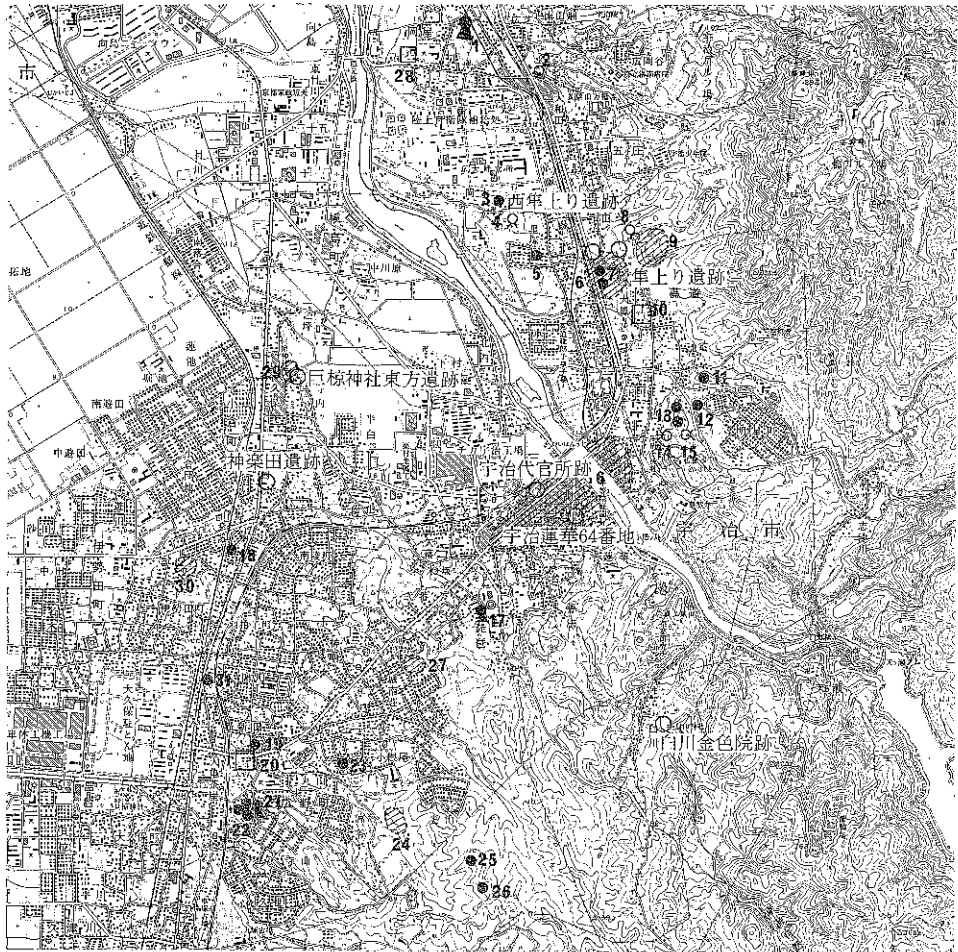


## 凡 例

1. 本書は昭和52年度から昭和56年度にかけて，宇治市教育委員会もしくは各遺跡調査会が実施した宇治市内の埋蔵文化財発掘調査概報である。
2. 本書に収録した調査の主体，担当者，調査年月は下表のとおりである。

遺跡名称	調査主体	担当者	年・月
神楽田遺跡	神楽田遺跡発掘調査会	服部和一	S52・5
西隼上り遺跡	西隼上り遺跡発掘調査会	山田良三	S53・7,8
白川金色院跡	宇治市教育委員会	吉水利明	S55・1～3
巨椋神社東方遺跡	宇治市教育委員会	吉水利明	S55・12
隼上り遺跡	隼上り遺跡発掘調査会	奥村清一郎 吉水利明	S56・8,9
宇治市街遺跡	宇治市教育委員会	吉水利明	S56・9
宇治市街遺跡	宇治代官所跡遺跡発掘調査会	吉水利明	S56・9,10

3. 本書の編集は宇治市文化財調査員杉本宏が行った。
4. 本書に収録した遺跡の位置は第1図のとおりである。
5. 執筆者は各文末に記してある。



第1図 本書収録調査地位置図

- |             |            |            |           |
|-------------|------------|------------|-----------|
| 1 二子塚古墳     | 2 芝ノ東窯     | 3 瓦塚古墳     | 4 岡本瓦窯    |
| 5 一里塚古墳     | 6 西牟上り遺跡   | 7 牟上り1・2号墳 |           |
| 8 牟上り瓦窯     | 9 羽戸山遺跡    | 10 大鳳寺跡    | 11 池山古墳   |
| 12 妙見古墳     | 13 二子山古墳群  | 14 山本須恵器窯  | 15 宇治瓦窯   |
| 16 宇治市街遺跡   | 17 丸山古墳    | 18 石のカラト古墳 |           |
| 19 一里山古墳    | 20 広野庵寺    | 21 坊主山古墳群  | 22 金比羅山古墳 |
| 23 庵寺山古墳    | 24 八軒屋谷遺跡  | 25 宇治一本松古墳 |           |
| 26 八軒屋谷古墳   | 27 野神遺跡    | 28 宇治郡衙推定地 |           |
| 29 巨椋神社東方遺跡 | 30 伊勢田神社遺跡 | 31 伊勢田塚古墳  |           |

## 目 次

1. 神楽田遺跡発掘調査概報 .....	1
2. 西隼上り遺跡発掘調査概報 .....	11
3. 白川金色院跡発掘調査概報 .....	19
4. 巨椋神社東方遺跡発掘調査概報 .....	27
5. 隼上り遺跡発掘調査概報 .....	33
6. 宇治市街遺跡立合調査概報 .....	47
7. 宇治市街遺跡発掘調査概報 .....	53



## 挿 図 目 次

第1図 本書収録調査地位置図

### 神楽田遺跡

第2図	調査地位置図	4
第3図	トレンチ配置図	5
第4図	トレンチ平面・断面図	6
第5図	SE01実測図	7
第6図	弥生土器実測図	8
第7図	SE01中層出土土器実測図	8

### 西隼上り遺跡

第8図	調査地位置図	14
第9図	トレンチ配置図	16

### 白川金色院跡

第10図	調査地位置図	21
第11図	トレンチ平面図	22
第12図	北トレンチ北壁断面図	23
第13図	土器・瓦実測図	25

### 巨椋神社東方遺跡

第14図	調査地位置図	29
第15図	弥生土器実測図	31

### 隼上り遺跡

第16図	調査地位置図	36
------	--------	----

第17図	旧巨椋池周辺の主要遺跡分布図	37
第18図	トレンチ配置図	40
第19図	第1 トレンチ平面・断面図	41
第20図	土器実測図	42

## 宇治市街遺跡立合

第21図	調査地位置図	49
第22図	土器実測図	50

## 宇治市街遺跡

第23図	調査地位置図	55
第24図	トレンチ配置図	57
第25図	S E 01上層土器実測図	61
第26図	S E 01中・下層土器実測図	62
第27図	包含層土器実測図	63
第28図	瓦実測図	64
第29図	S E 01土師皿器高・口径指数図	66

## 表 目 次

第1表	第17図附表	38
-----	--------	----

## 図 版 目 次

巻頭図版 鉄釉四耳壺（宇治市街遺跡）

### 神楽田遺跡

- 図版第1 (1)調査地全景 (2)トレンチ全景  
図版第2 (1)S K02弥生土器出土状況 (2)S E01

### 白川金色院跡

- 図版第3 (1)調査地全景 (2)トレンチ全景  
図版第4 (1)北トレンチ全景 (2)調査風景  
図版第5 (1)北トレンチ北壁土層 (2)しがらみ  
図版第6 白川金色院 古絵図（白川地藏院蔵）

### 巨椋神社東方遺跡

- 図版第7 (1)調査地全景 (2)トレンチ近景  
図版第8 (1)トレンチ近景 (2)弥生土器出土状態

### 隼上り遺跡

- 図版第9 (1)調査地全景 (2)調査風景  
図版第10 (1)第1 トレンチ (2)第1 トレンチS D04瓦出土状況  
図版第11 (1)第2 トレンチ (2)第3 トレンチ  
図版第12 花粉写真

### 宇治市街遺跡

- 図版第13 (1)調査風景 (2)トレンチ全景  
図版第14 (1)S E01検出状況 (2)S E01完掘状況  
図版第15 S E01出土土器  
図版第16 S E01出土土器  
図版第17 S E01出土土器，包含層出土土器・瓦

# 1. 神楽田遺跡発掘調査概報

## 例 言

1. 本報告は，神楽田遺跡発掘調査概報である。
2. 発掘調査組織は，下記のとおりである。

調査主体 神楽田遺跡発掘調査会

調査責任者 神楽田遺跡発掘調査会会長 依田孝一（宇治市教育委員会教育長）

調査指導者 近畿大学教授 杉山信三

京都府立城南高等学校教諭 山田良三

調査担当者 宇治市教育委員会主事 服部和一

調査補助員 竹原一彦，坪本幸三，岩本清一，白土仁，石田千秋（以上花園大学学生）

調査協力者 高橋美久二（京都府教育委員会文化財保護課）

近藤義行（城陽市教育委員会）

木村譲二（京都田園ボーリングセンター）

近畿土地株式会社

## 1. はじめに

神楽田遺跡は、昭和46年宇治市史第一巻執筆のため市内の遺跡分布調査において、小倉田園ボーリング場建設の基礎工事で弥生後期終末に属する土器片若干が出土しているのが発見され、昭和47年発行「京都府遺跡地図」(京都府教育委員会)に掲載された遺跡である。

今回、このボーリング場跡地に、近畿土地株式会社によるマンション建設が計画され、事前調査を実施することとなった。発掘調査にあたって神楽田遺跡発掘調査会を組織し、昭和52年5月16日から同23日まで現地調査を実施した。

調査期間中、御指導・御協力を賜った多くの方々へ心より感謝したい。

## 2. 位置と環境

神楽田遺跡は宇治市小倉町神楽田に所在し、地形的には洪積台地である宇治丘陵の北端から北へ舌状に突き出す沖積段丘の西端にあたり、旧巨椋池東岸に立地する。調査地は、近鉄小倉駅の南東約100m、国道24号線に隣接しており、標高12mをはかる。

当遺跡から北の沖積段丘先端には式内社の巨椋神社(通称子守神社)が位置するが、その境内地付近より弥生土器片と磨製石器片、凸基式石鏃1個が出土している<sup>注1</sup>。現在、宇治丘陵で2ヶ所より石鏃の採集があり、宇治野神の神明遺跡からは磨製石鏃片1個、石槍片2個、打製石鏃28個以上、神明石塚遺跡からは平基式石鏃1個の採集をみている<sup>注2</sup>。その他の弥生遺跡としては、広野町一里山、菟道西俣上り等の遺跡がある。

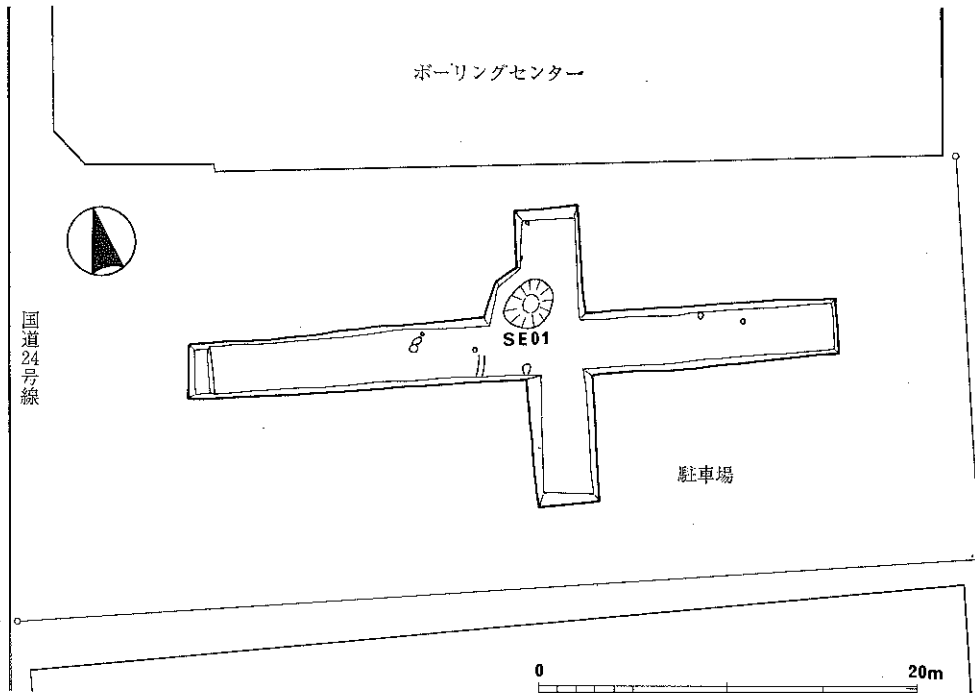
## 3. 調査の概要

調査地は駐車場として利用された空地を選び、浄化槽、高圧電線、ガス管の埋設を考慮しながら幅3m、東西34m、南北16mの十字トレンチを設定し、遺構検出に努めることとした。

現地表面は、水田に1m程の盛土をおこない、アスファルトが打たれている。このため、調査に先立ち5月12日、服部・竹原の立合いのもとに機械力で盛土排除をおこなった。旧水田耕土中に遺物が無いことを確認のうえこの層を除去した。ここまでの現地表面より1



第2図 調査地位置図 (1:5000)



第3図 トレンチ配置図

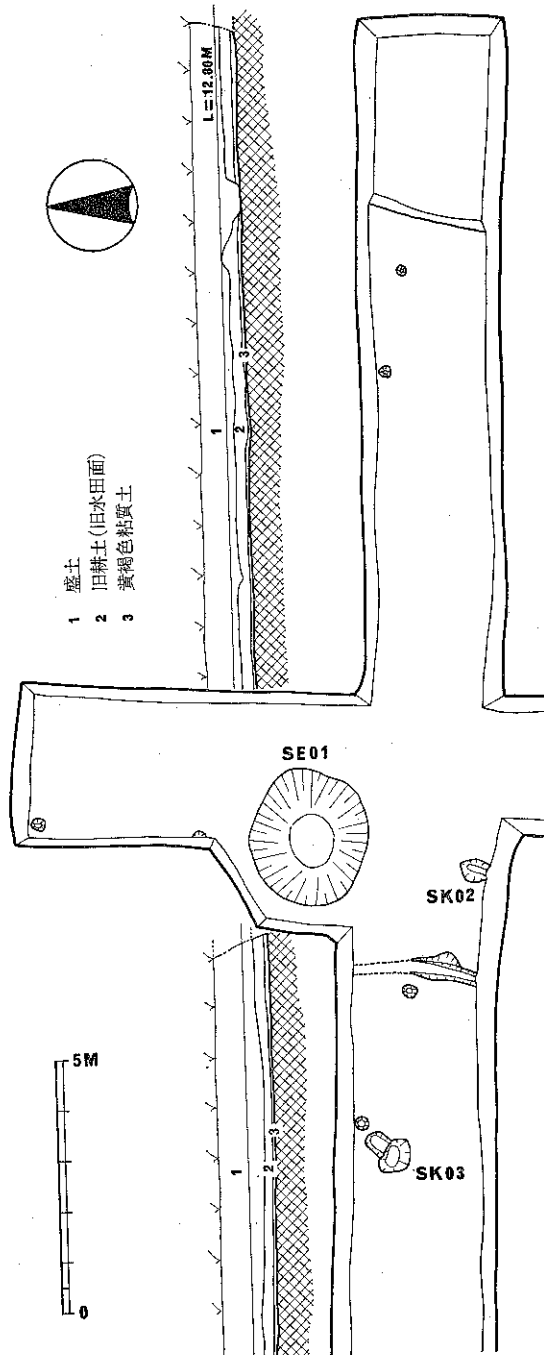
m前後下がったことになる。耕土層直下には厚さ10cm前後の黄褐色粘質土層があり、その下には茶褐色砂礫土が検出できた。後者は、ボーリングセンター建築に伴う地盤調査報告によれば、沖積砂礫層であり層厚3mを測る。したがって当層を地山とし、当層上面で遺構検出を行なうこととした。

## 4. 遺 構

柱穴・土塋・溝・井戸等を検出した。しかし、それぞれまとまりが把握しがたく、その性格についても不明なものが多いし、その時期も推測しがたいものが大半である。以下、時期の確認できたものに関り2～3概述する。

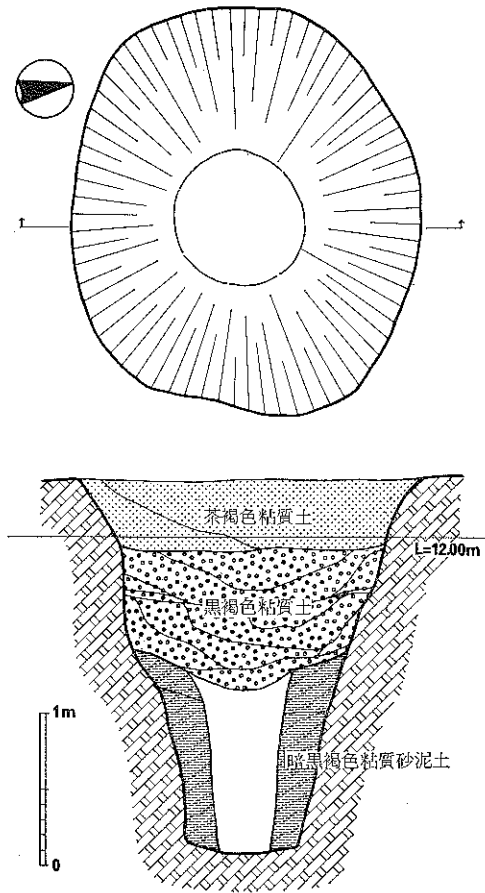
SE01 (第5図) トレンチ中央部北寄りで検出した素掘りの井戸である。平面は不整形円形状を呈し、東西2.75m、南北2.30mを測る。断面形は底部に向かってすぼまる逆円錐台形をなし、底部では径東西0.90m、南北0.85mとかなり円形に近いプランをなす。深さは検出面より-2.45mで底である。土層の堆積状況より、井戸中程まで木製の井筒を使用し





第4図 トレンチ平面・断面図

ていたと考えられる。井戸内より一部木材片を検出しているが、それが井筒残欠の可能性もある。



第5図 SE01実測図

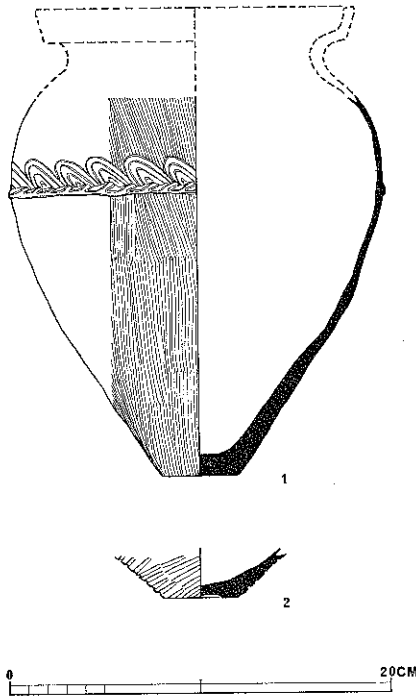
井戸内埋土は最上層に茶褐色粘質土，その下に黒色粘質土，その下に井筒内埋土と井筒掘方埋土である暗黒灰色粘質砂泥土があり，掘方埋土を除けば大きく上・中・下層の3層に分層できる。12世紀前半から中葉には廃絶したらしい。

**SK02** トレンチ中央部で検出した東西50cm，南北40cm，深さ21cmの不整形の土塊。弥生土器(1)が口縁部を北東に向け，ほぼ水平にすえられた状態で出土した。

**SK03** トレンチ西部で検出した東西65cm，南北60cm，深さ29cmの隅丸方形の土塊。弥生土器片(2)が出土。  
(服部和一)

## 5. 遺 物

今回出土した遺物は，弥生土器，土師器，瓦器，中世陶器，近世陶磁器，輸入磁器等の

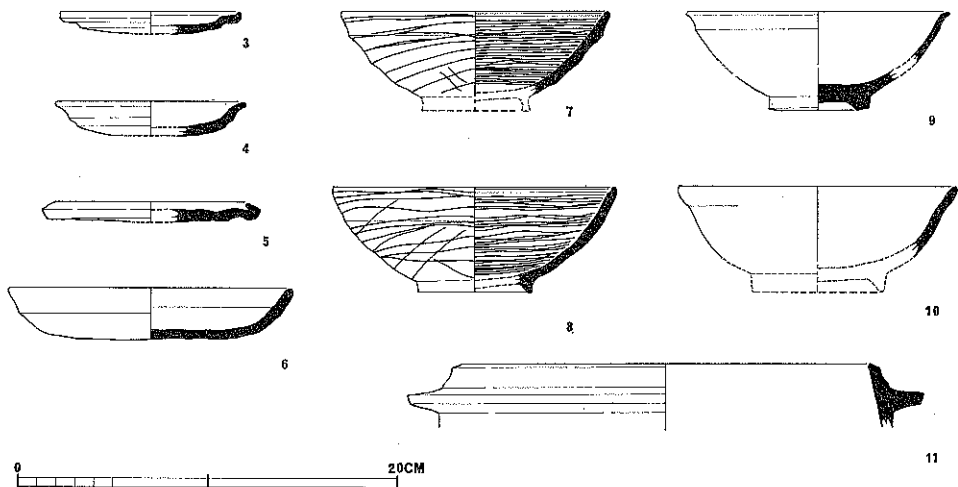


第6図 弥生土器実測図

土器類の他、石製硯片、鉄釘片等が約コンテナ1箱分ある。以下、SK02・SK03出土弥生土器及びSE01出土土器について概述する。

SK02・SK03出土弥生土器（第6図）個体数としては3個体分が認められ、図化可能であったものは2個体であった。(1)は推定器高24cm程度の甕でSK02より出土。肩部最大腹径点に凸帯文を、その上部に起伏の大きい波状文を施す。外面はやや荒いハケ調整で、内面はナデ調整である。このような凸帯文様を有す土器は、所謂近江系後期弥生土器にしばしば見受けられるものであり、本品についても口縁部欠失のため即断はできないとしても、近江系の可能性が高い。山城地方はその地理的条件において近江の影響を受けており、宇治を含む南山城地方では他に、八幡市幣原遺跡<sup>注3</sup>、美

濃山廃寺下層<sup>注4</sup>、田辺町天神山遺跡<sup>注5</sup>等で近江系の土器を出土している。(2)は甕の底部片であり、SK03より出土している。外面はタタキ成形で、内面はナデ調整であり所謂畿内第V様式に相当するものである。



第7図 SE01中層出土土器実測図  
土師器（皿：3~6、羽釜：11）瓦器（碗：7、8）  
輸入磁器（白磁碗：9）中世陶器（山茶碗：10）

**SE01出土土器**（第7図）SE01埋土が3層に分層できたことは既に述べたとおりである。しかし、その中で上・下層は出土量が少なく、かつ細片化されているものが多いため、中層に限って概述することとする。なお、下層より石製硯片が出土している。

中層出土土器の器種には、土師器、瓦器、中世陶器、輸入磁器が認められる。土師器はその大半が皿であり、型的に次の4種がある。A：口縁部を水平方向に屈曲させ、端部をつまみ上げるもの(3)、B：口縁部に2回のヨコナデを施すことにより口縁部外面が波うつもの(4)、C：口縁部がそのまま外上方にのびるもの(6)、D：口縁部を急激に内側に折り返すもの(5)である。各型式の比率は細片が多いため不明。他に羽釜(1)がある。瓦器は碗のみ確認できた。口径14～15cm前後、器高5.5cm前後で高目の高台を付し、体部内外面にヘラミガキを施す。体部外面が不調整のため凹凸するもの(7)と、そうでないもの(8)とがあり、ともに口縁端部内側に1条の凹線を巡らす。前者は大和型に、後者は樟葉型にあてはまると<sup>注6</sup>考える。前者は5個体中1個体のみである。中世陶器には壘体部片、山茶碗(10)があり、壘は外面に平行タタキを施すものと、ナデ調整のものがある。山茶碗は、灰釉陶より無釉陶に変化して間もないものと考えられ、体部に湾曲するカーブを留めている。輸入磁器は白磁碗(9)がある。口縁端部を急に折り返すもので、断面台形状の削り出し高台を付す。以上のような土器組成は型的に大きな矛盾はなく、瓦器碗の型式より12世紀前半から中葉にかけての年代が与えられると考えられる。（杉本宏）

## 6. ま と め

今回の発掘調査は、はからずも市内初の弥生遺跡とはなったが、その性格等については不明であり、今後の発掘調査の成果に期する所が大きい。以下、今回の調査の成果を要約し、まとめとしたい。

層位的には、盛土、旧水田耕土を除去して現われる黄褐色粘質土層はそこに包含される土器類より中世に形成されたものと考えられる。しかし、その標高は12～13m前後であり、後のデータではあるが旧巨椋池の水位が海拔13.60m～10.71mの間であったことから増水期には冠水等の被害をこうむる危険性をはらんだ土地柄だと考えられる。各遺構はこの層下にて検出できた。

弥生時代遺構SK02、SK03については性格不明であるが、北方約300m地点に弥生中期の巨椋神社東方遺跡も存在することから、調査地の至近に弥生後期の集落の存在が推察

される。一方、中世遺構としては、井戸跡があり、調査地そのものが生活空間の一部ではあるが、その具体像は不明である。また、井戸内より硯の出土をみていることより、識字者層の居住が付近に考えられる。

いずれにしても周辺の今後の発掘調査を期待したい。

(服部和一)

[注]

注1. 田辺昭三「先土器から稲作へ」(『宇治市史』1巻, 昭和48年)

注2. 同上

注3. 梶圭三郎・高橋美久二「八幡丘陵地所在地遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会, 昭和44年)

注4. 江谷寛『美濃山麓寺跡発掘調査報告』(八幡町教育委員会, 昭和52年)

注5. 森浩一『田辺天神山弥生遺跡』(学校法人同志社, 昭和51年)

注6. 橋本久和「中世土器研究予察」(『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会, 昭和55年)

## 2. 西隼上り遺跡発掘調査概報

## 例 言

1. 本報告は、西隼上り遺跡発掘調査概報である。
2. 現地調査は、昭和53年7月21日から同年8月10日まで実施した。
3. 発掘調査組織は、下記のとおりである。

調査主体 西隼上り遺跡発掘調査会

調査責任者 西隼上り遺跡発掘調査会会長 依田孝一（宇治市教育委員会教育長）

調査担当者 京都府立城南高校教諭 山田良三

調査協力者 積水ハウス株式会社

株式会社和光コンサルタント

日東土木株式会社

## 1. 位置と環境

西隼上り遺跡は、京都府遺跡地区に遺跡番号 4406-32 と記載されている弥生時代遺物散布地の遺跡である。遺物としては、石庖丁の発見が伝聞されている。<sup>注1</sup>

行政上は、宇治市菟道西隼上り（旧山城国宇治郡）に位置する。

地形上は、宇治市東部の山地（醍醐山地）の西麓に位置する。この付近は、醍醐山地から宇治川へ流入する小川によって形成された扇状地性微高地である。

今回の調査地は、西隼上り 4, 4-5, 10, 10-5, 11-5, 12-6 に所在する。京阪三室戸駅から北東約 750 m の府道と市道に囲まれた 7,307.2 m<sup>2</sup> の土地である。

考古学的環境としては、調査地の南側の市道をへだてた茶園に、西隼上り古墳 2 基が位置する。南北に並ぶ 2 基の古墳のうち、南側の墳丘は、すでに封土が失われ、横穴式石室の下部が露出している。

さらに南東の旧大鳳寺村の集落内には、白鳳時代創建の大鳳寺跡が存在する。

宇治市内の弥生遺跡は、宇治丘陵上に、神明石塚遺跡、宇治野神の神明遺跡と広野町一里山の遺跡の 3 ケ所があり、丘陵の北端に接する沖積段丘の先端には、小倉町の神楽田遺跡と巨椋神社（式内社、通称子守神社）境内付近の遺跡の 2 ケ所がある。<sup>注2</sup> いずれも宇治川西部の遺跡である。宇治川東部では、西隼上り遺跡が唯一の遺跡である。

## 2. 調査の経過

調査地の北区域は、西に舌状に突き出した平坦な地形になっており、旧地表が保存されていると思われた。ただ、昭和37年頃から養鶏場の経営がおこなわれ、家屋の基礎のコンクリートが残っていた。

南区域は、北東から南西へ傾斜するが、西へいくにしたがい傾斜はおだやかになる。

調査は、南区域から開始した。調査地内における遺跡の存在を確認することを目的としたが、西隼上り古墳との関連から、調査地内にも古墳が存在する可能性も考えられるため、合せて確認できるようトレンチを設定した。

表土は、砂礫土であり、旧地表はすでに削除されて、地山が露出していると観察された。まず、トレンチ 2, 3, 4 を設定し、土層観察をおこなったが、コンクリート片などが





第8図 調査地位置図 (1:5000)

出土し、置土と考えられた。

旧地主の話によると、養鶏場経営中に2～3mの埋土をおこなって現状のようになったという。そこで、置土の除去を機械掘でおこなうことにした。

一方、トレンチ列の東側に、トレンチ6、7を設定したが、いずれも置土であることを確認した。

置土の除去は、すべて機械力でおこなうことにしたが、置土は締りが悪く崩壊の危険があるので、底部では3m×3mを確保し、開口部は傾斜をもたせて調査の安全を確保した。

さらに、トレンチ1、8を設定して、南区域のトレンチは7ヶ所となった。

北区域は、3m×3mのグリッドを2ヶ所設定したが、砂質土の置土であった。このためグリッドの間に設定したトレンチ（トレンチ5）で土層観察をおこなった。

いずれのトレンチからも遺物、遺構は検出されなかった。

### 3. 各トレンチの状況

**トレンチ1.** 南区域で最も東に設定した、巾1.5m、長さ11mのトレンチである。現地表下-85~-120cmは置土層で、その下層はほぼ平坦な地山層である。

**トレンチ2.** 現地表下-80cmで灰色砂質土層の地山となる。この付近から地山は傾斜する。

**トレンチ3.** 現地表下-320cmで黒色土（旧地表）となる。その下層は、約30cmの暗灰色系の土層に続き、灰色砂質系の地山となる。湧水が見られた。

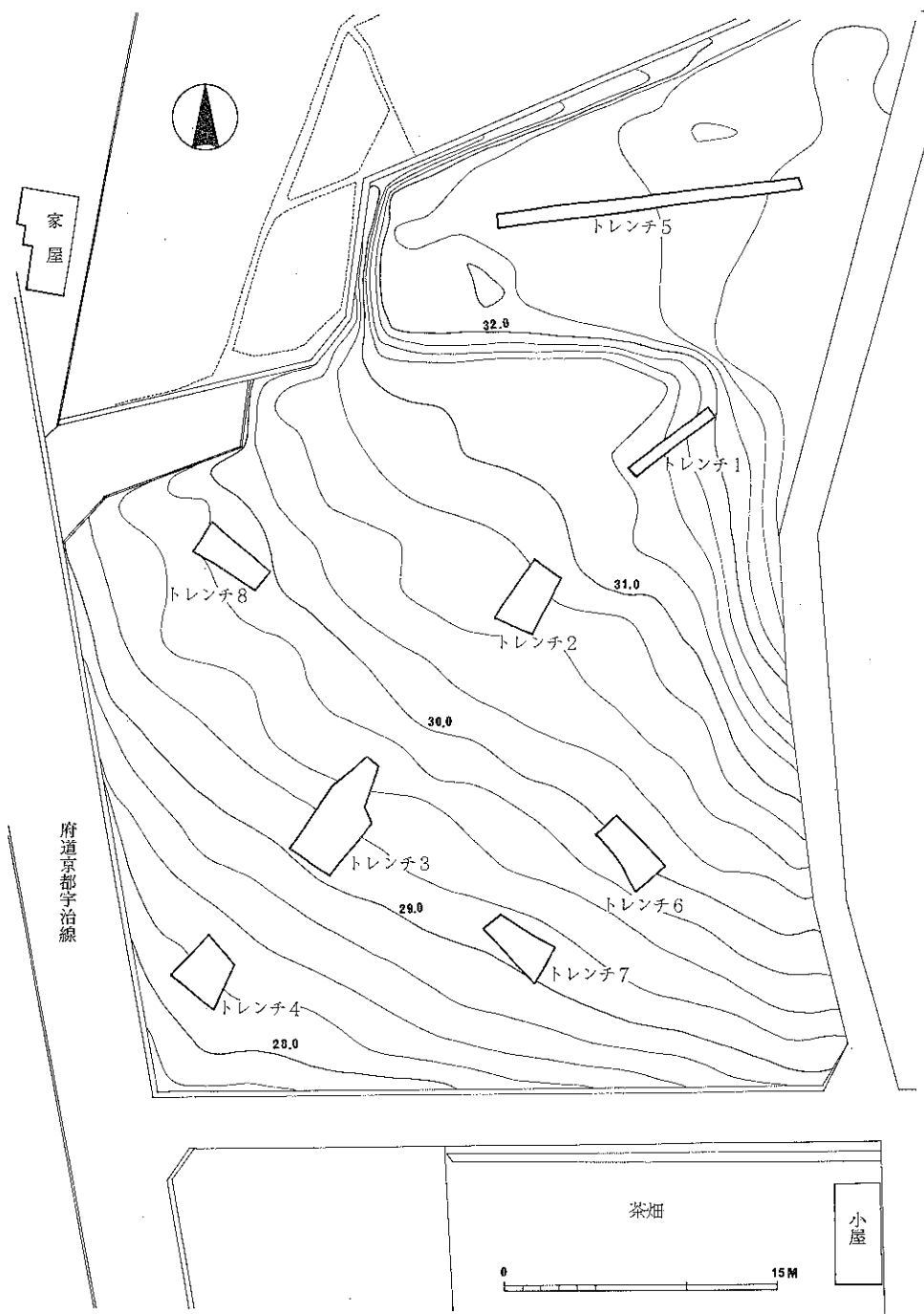
**トレンチ4.** 現地表下-300~-320cmまでは、ゴミ、コンクリート片を多量に含んだ置土である。その下層は黒色土（旧地表）となるが、湧水が著しい。見ている間に水が溜まり、トレンチが崩壊してくる。写真撮影の後、危険防止のため、埋めもどす。

**トレンチ5.** 北区域に東西の方向に設定したトレンチで、巾1.5m、長さ33.5mの大きさである。現地表下-20~-110cmで暗灰色砂質土の地山となる。旧地表は攪乱を受けている。

**トレンチ6.** 現地表下-200~-220cmの置土層の直下に、植物根を含む黒色土（旧地表）がある。その下層に、茶の木列が残る茶園の耕土があり、その下層は地山である。

**トレンチ7.** 現地表下-170cmで黒色土となり、その下層は、茶の木列の残る耕土である。トレンチ6と同様の土層であった。

**トレンチ8.** 現地表下-230~-260cmの置土の下層は、灰色砂質土層（地山）である。



第9図 トレンチ配置図

## 4. ま と め

旧地主の玉置氏によると、南区域は道路工事などのため過去に土取がおこなわれ、市道から2～3mほど低かった。また、南東の市道沿い（トレンチ6，7付近）は茶園であった。降水があると水が溜って池の様になり、どじょうなどの棲息も見られたそうである。

トレンチ内での観察では、黒色土とその下層の粘質土層は、水分を多分に含んでいる。

今回の調査では、過去の土取等により、包含層はすでに失なわれていたため、遺構、遺物とも検出されなかった。

（服部和一）

### 〔注〕

注1. 『京都府遺跡地図』（京都府教育委員会，昭和47年）

注2. 田辺昭三「先土器から稲作へ」（『宇治市史』第1巻，昭和48年）



### 3. 白川金色院跡発掘調査概報

## 例 言

1. 本報告は、白川金色院跡発掘調査概報である。
2. 現地調査は、昭和55年1月9日から同年3月29日まで実施した。
3. 発掘調査組織は、下記のとおりである。

調査主体 宇治市教育委員会

調査責任者 宇治市教育委員会教育長 依田孝一

調査指導者 杉山信三（近畿大学教授）

中谷雅治（京都府教育委員会文化財保護課）

調査担当者 宇治市教育委員会社会教育課主事 吉水利明

調査事務局 宇治市教育委員会教育次長 竹内禮三

社会教育課長 杉本敬一

総務部財政課主幹 石川櫛一

管財係 一井由加里

調査協力者 服部明信，服部善一（服部製作所）

調査参加者 杉本敬一，岡本茂樹，伊藤忠正，萬 守，伊藤 勉，土橋 昇，  
梅垣 誠，栢木利和，石川櫛一，小林一久，福田富美男，蔦谷春樹，  
寺田 治，井上利一，江口修身，戸根安広，角田喜雄，西江正志，  
柿平健治，野口憲男

4. 調査後の遺物整理・図面整理は杉本宏（宇治市文化財調査員）が行い、志村みどり（龍谷大学卒業生）の協力を得た。

## 1. はじめに

宇治市は、白川娑婆山16-1番地において集会所の建設を計画し、同計画に関わる埋蔵文化財の問題について当委員会に協議を求めた。当委員会は、当該地が周知の遺跡である平安時代の金色院跡に相当するため、文化財保護法に基づく所定の手続きが必要であり、工事着手に先立ち遺跡確認のための試掘調査が必要である旨回答した。

その後、宇治市長から提出された文化財保護法第57条の3の通知書に基づき、府教委文化財保護課に指導を求めたところ、白川地蔵院蔵の古絵図によれば、予定地が池とあるため、少なくともこの地図の信憑性を確認する必要があるだろうとの指導を得たが、こ



第10図 調査地位置図 (1:5000)



れに基づいて今回の調査を実施することになった。

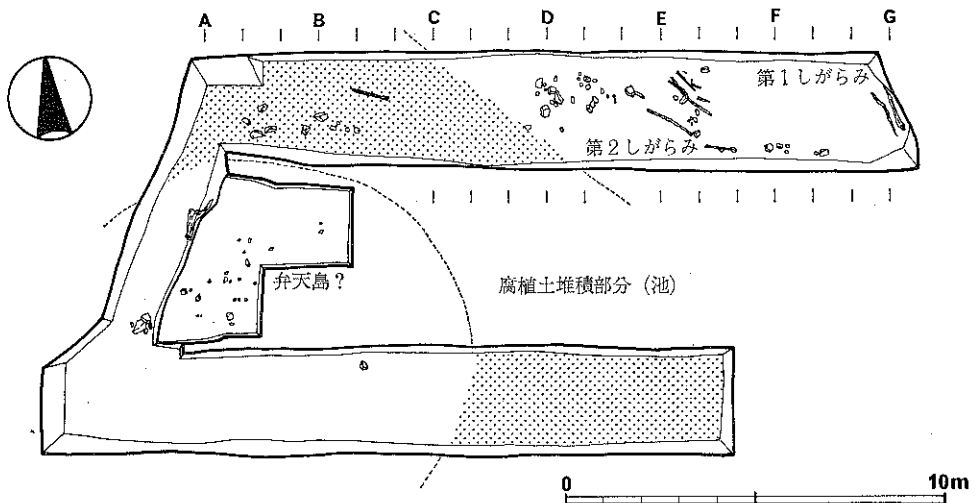
現地調査及びその後の遺物整理について御協力・御指導を賜った多くの方々に心より感謝したい。

## 2. 調査概要

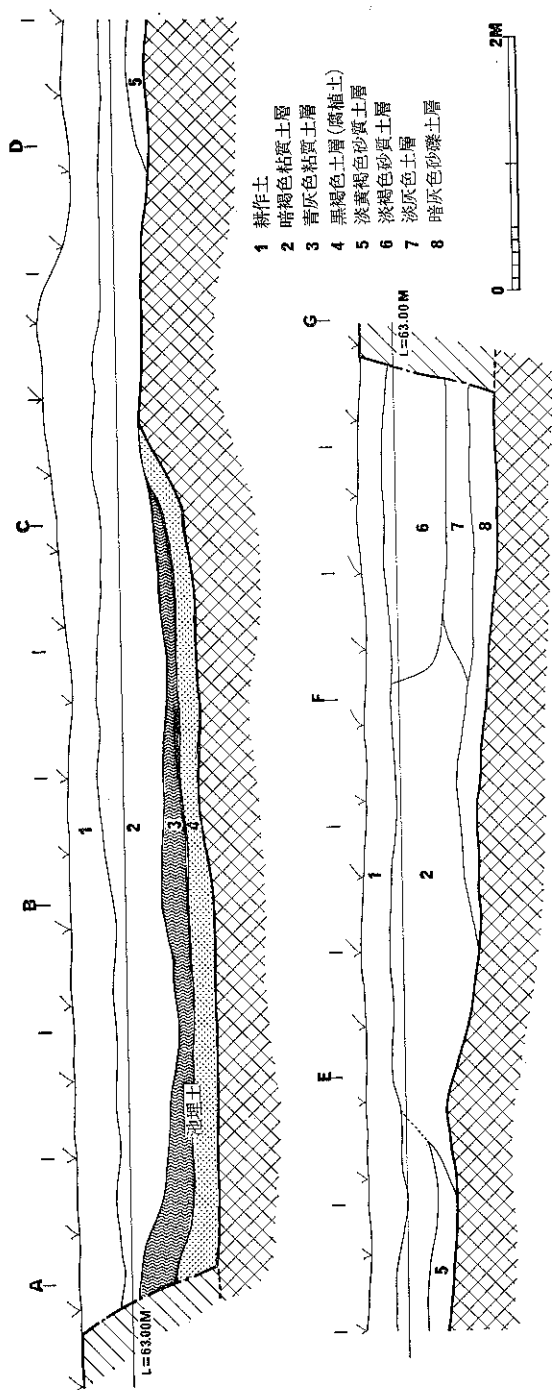
金色院は、藤原寛子が康和四年（1102）に創建したと伝えられ、白山神社は、この金色院の鎮守と伝えられる。建設予定地は、久安二年（1146）の創建と伝えられる重要文化財白山神社拜殿の参道西側に位置する。現地は、休耕田であり、調査地は付近より一段低い所である。更に一段低い東端には、寺川が南から北へ向かって流れている。発掘予定地付近の標高は、約63mである。

昭和53年11月14日、調査地の南側で白山神社防火貯水槽の設置に伴って、立合調査が実施された。これによると、地表下281cmまでが6層に分かれ（東壁）上から順に、表土、黄褐色砂層15cm・2層、茶褐色土層26cm・3層、褐色土層20cm（木の根含む）・4層、褐色土層（バラス混入）70cm・5層、茶褐色土層70cm・6層、青灰色粘質土層（石混入）となっている。

調査は、昭和55年1月9日に開始し、草刈りに引き続き、東西に巾3m×長さ20mのトレンチを2本設定した。トレンチ名称は、北側に設定したトレンチを北トレンチ、南側のものを南トレンチとした。とりあえず、人力による試掘を実施したが、表土が厚い粘土層



第11図 トレンチ平面図



第12図 北トレンチ北壁断面図

のため、1月16日機械力によって表土（耕土層）と、その下層を60~80cm除去した。この際に、北トレンチと南トレンチの関係を判断するため、「コ」の字形に一部トレンチを拡張した。

その結果、北トレンチで、性格不明の石塊数個と、黒色腐植土層を検出した。この石塊は、北トレンチの東半部と南トレンチの西端北側に散乱していることが判明した。一方、黒色腐植土層は、北トレンチの西半部と南トレンチの東半部にレンズ状に堆積していることが判明し、この黒色腐植土層の堆積箇所が池の範囲を示すものと考えられるに至った。更に、この池状の落ち込みは、トレンチの北西部から南東部にかけてゆるやかな弧状を描いてカーブしていることから、トレンチの南西部付近は、島状もしくは半島状の高まりを形成していたものと推定できる。従って先にふれた石塊群並びにその周辺で検出された自然木群は、この池状遺構の護岸施設に関係するものかも知れない。

(吉水利明)

### 3. 遺物 (第13図)

土師器・須恵器・瓦器・瓦等がコンテナ1箱分出土している。主体は土師器皿である。タイプ・法量的にも各種認められる。(5)は、平安京内膳町の土師器Cタイプに相当<sup>注1</sup>し、しかもその最も退化したものである。(1)は、口縁部にヨコナデを施したもので、内膳町SD41Aに通有に認められる。<sup>注2</sup>(3)は、江戸期のものであろう。他器種としては、東播系のスリ鉢(4)と、瓦器椀(11)とがある。スリ鉢は口径21cmであり、やや小型品の感がある。瓦器椀は、内外面風化が激しく、調整不明である。

瓦は、軒平瓦(NH01, 02)が2点出土している。土器が基本的に池内出土であるのに対し、瓦は、NH01は池内出土であるものの、NH02は表採である。共に均整唐草文であり、凹面に布目を残す。NH01は黒色を呈し、やや軟質な感じを受けるが、NH02は硬く、焼けしまっており、須恵質に近い。前者は江戸期に、後者は中世に相当するものであろうか。

(杉本宏)

### 4. ま と め

今回の調査により確認できた池状遺構は、埋土層出土の遺物から考えると、平安時代後期には造られ、江戸時代まで存続し、その後現在みる水田になったと考えられる。

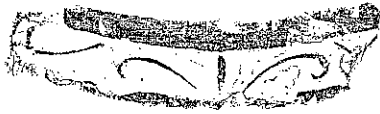
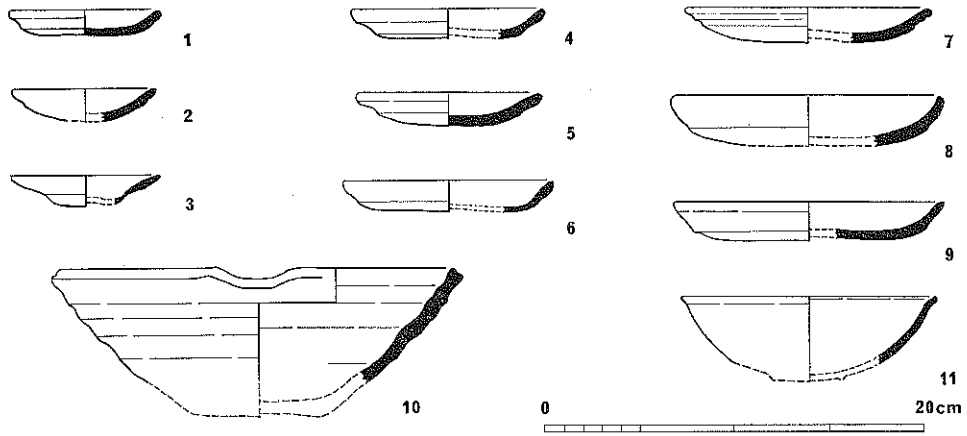
白川地蔵院蔵の古絵図によれば、弁天池と記された池が描かれており、都名所圖會拾遺卷四にも同様の金色院のさし絵が載せられている。今回の調査で検出された池状遺構並びに島状遺構は、これらの記録にしるされた弁天池及び弁天島の一部に該当するものと考えられる。

近衛政家の日記『後法興院記』<sup>注3</sup>応仁元年8月28日条には、

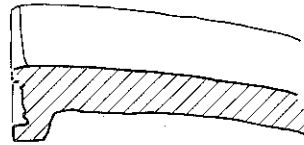
「巡見白河別所處々庭給事、殿并余小弟兄兩人報恩院僧正以下向白河別所令巡見處々庭、歸路於山路有一盞事、雨灑之間指笠了、不可説之躰却有其興、次有御歴覽橋寺、次有御參詣離宮」

とあることから、この時期には、創建時の面影をとどめる庭園が存在していたと考えられる。

白川地区周辺、特に金色院関係の7堂及び16坊があったと伝える所は、遺物の散布が著



NH01



NH02



第13図 土器・瓦実測図

土師器（皿：1～9）須恵器（鉢：10）瓦器（碗：11）軒平瓦（NH01, NH02）

しく、金色院関係の遺構が遺存している可能性が高いことは、今回の調査結果から容易に推察することができる。今後当地区での開発行為等に際しては、十分な配慮が必要である。

(吉水利明)

[注]

注1. 平良泰久他「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会，昭和55年）

注2. 同上

注3. 西田直二郎「白河金色院」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊，大正14年）

#### 4. 巨椋神社東方遺跡発掘調査概報

## 例 言

1. 本報告は、巨椋神社東方遺跡発掘調査概報である。
2. 現地調査は、昭和55年12月17日から、同年12月22日まで実施した。
3. 発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査主体 宇治市教育委員会

調査責任者 宇治市教育委員会教育長 依田孝一

調査担当者 宇治市教育委員会社会教育課社会教育主事 吉水利明

調査事務局 宇治市教育委員会

教育次長 竹内禮三

社会教育課長 杉本敬一

社会教育係長 岡本茂樹

主査 伊藤忠正

主事 長谷川暁子

調査協力者 巨椋神社，宮本光三（巨椋神社宮司）

山田良三（京都府立城南高校教諭）

調査参加者 杉本敬一，伊藤忠正，萬 守，荒木重一，八木隆明，梅津 茂，

土橋 昇，梅垣 誠，服部和一

4. 調査後の遺物整理・図面整理は、杉本宏（宇治市文化財調査員）が行った。

# 1. はじめに

宇治市教育委員会は、宇治市小倉町寺内31番地において、小倉公民館改築工事を計画した。当委員会は、当該地の北150mの地点で微細な弥生式土器片等が採取され、また南約700mには、神楽田遺跡が知られていることから、文化財保護法に基づく所定の手続きをとり、遺跡確認のための試掘調査を実施することになった。

当該地には、昭和5年に建てられた木造の公民館があったので、これを取り壊したのち調査を実施することになった。

現地調査及びその後の遺物整理について御協力・御指導を賜った多くの方々へ心より感



第14図 調査地位置図 (1:5000)



謝したい。

(吉水利明)

## 2. 調査の経過及び概要

今回調査の対象となった地域は、宇治丘陵から北方に向かって突出した狭長な沖積段丘の先端にあたる。この段丘の西方には、かつて広大な沼沢地（巨椋池）が広がり、東もまた湿地帯を形成したものと考えられる。

当建設予定地は、木造の公民館が建つまでは竹藪であったということから、土入れ等によって遺構面が攪乱されていると考えられた。

調査は、遺構・遺物を確認するために建設予定地に東西に2m×10m、南北に2m×16mのトレンチを十字に設定した。表土及び旧公民館基礎部を機械力によって除去した。2層目の黒色土層には、ブリキ板・ガラス・ビニール袋等を含んでおり、現代の攪乱層であることを確認した。3層目から人力によって掘り下げたが、遺構・遺物等検出されなかった。壁面調整する時点で地山上20cmに東西トレンチ中央東よりの断面に土器が混入している状態を検出した。遺物包含層は、東西トレンチ両端において厚く、また攪乱されていないことを考えれば付近から遺構が検出される可能性も十分考えられる。東西トレンチ東側にある畑の土地所有者の話によると、畑の耕作中に遺物がよく出土するという事である。

(吉水利明)

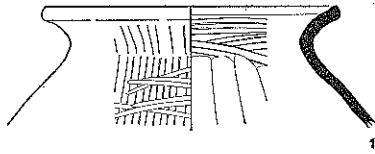
## 3. 遺物

弥生土器数個体分と、中世土器が若干出土しており、図化できたものは弥生土器2個体のみである。

### 弥生土器 (第15図)

甕形土器のみ数個体分出土している。(1)はその口縁部である。外面調整は、荒いタテハケで器面を調整した後、散漫なヘラミガキを施す。口縁部内面も外面と同じハケ調整を施した後、端部付近のみ強くヨコナデする。体部内面は板状工具でケズリ上げている。

(2)は、口縁部を欠失したものである。外面を細かいタテハケで調整し、内面は下から上までヨコ方向のナデを施している。ともに弥生時代中期後半に比定できるものであろう。



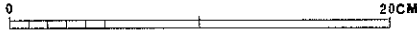
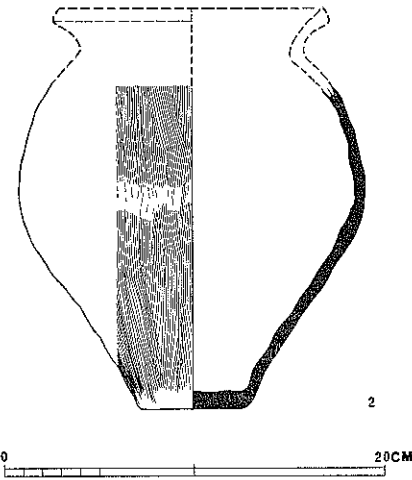
(杉本宏)

#### 4. ま と め

今回の調査では、残念にも遺構の検出はできなかったが、遺物の出土を見、しかもそれが、市内最初の中期弥生土器であったことは、旧巨椋池をとりまく歴史環境の解明に大変有意義な資料を提供したと言えよう。

今後、当該地付近の開発に際しては充分留意し、周辺遺跡の調査を綿密に実施する中で、この遺跡の実相を明らかにしていきたいと考える。

(吉水利明)



第15図 弥生土器実測図



## 5. 隼上り遺跡発掘調査概報

## 例 言

1. 本報告は、隼上り遺跡発掘調査概報である。
2. 発掘調査の組織は、下記のとおりである。

調査主体 隼上り遺跡発掘調査会

調査責任者 隼上り遺跡発掘調査会会長 依田孝一（宇治市教育委員会教育長）

調査指導者 京都府教育委員会文化財保護課

調査担当者 京都府教育委員会文化財保護課技師 奥村清一郎  
宇治市教育委員会社会教育課社会教育主事 吉水利明

調査補助員 幾山宏之，佐川正典，山崎裕孝

調査作業員 藤井源蔵，安堂市朗，久保見正男，辻本信太郎，田村新一，  
鈴木静恵，内海ハルエ

調査協力者 山田良三（京都府立城南高等学校教諭）  
梅田正人（京都府文化財保護指導委員）  
殖産住宅相互株式会社  
殖産土地相互株式会社
3. 調査後の遺物整理・図面整理は杉本宏（宇治市文化財調査員）が行い，志村みどり（龍谷大学卒業生）の協力を得た。
4. 当遺跡の花粉分析を徳丸始朗氏（大阪府立三島高等学校教諭）にいただいた。

## 1. はじめに

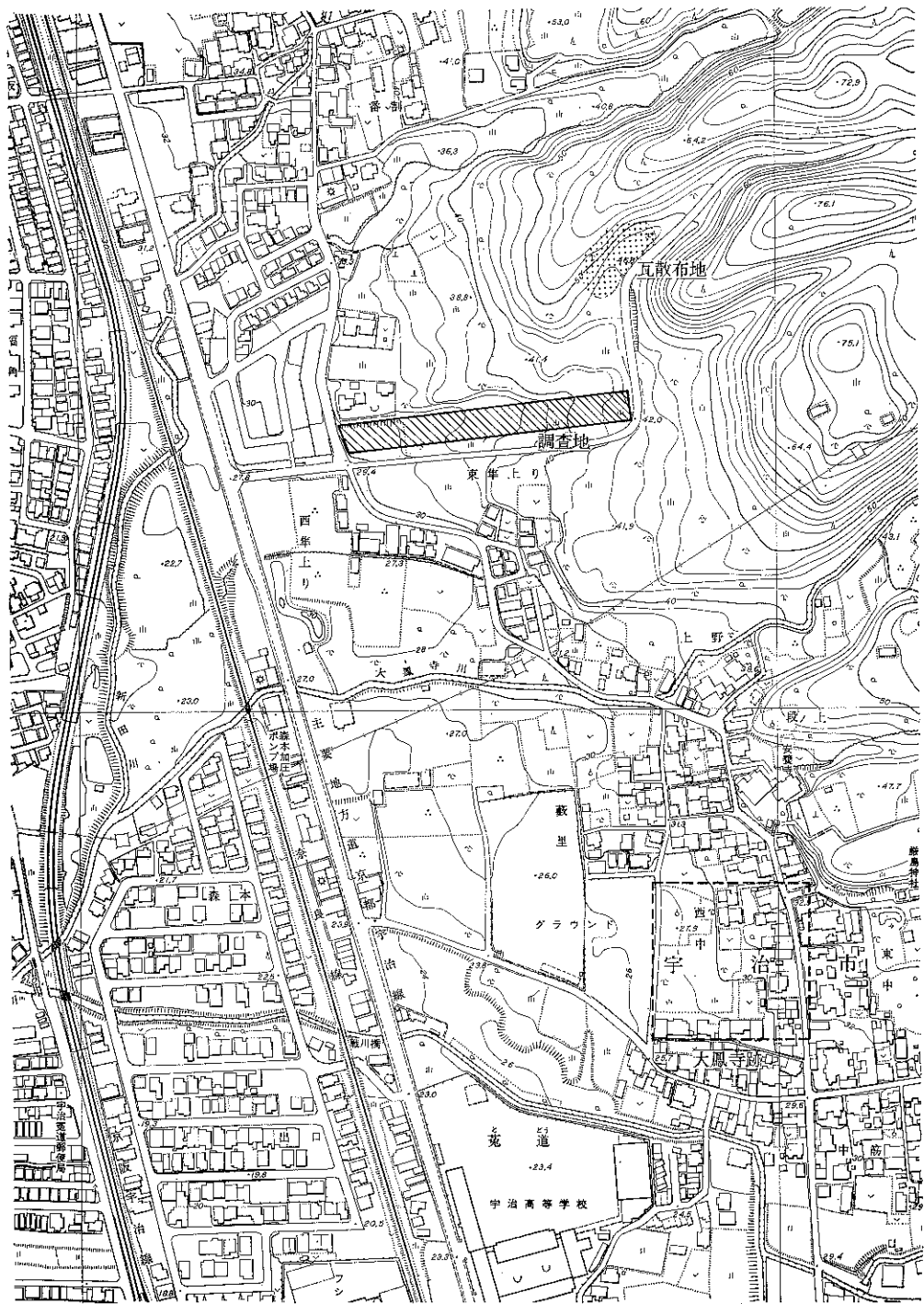
今回、宇治市菟道に所在する大鳳寺集落から丘陵の縁辺部を北へとる旧街道の東方において、大規模な宅地開発が計画されたため、宇治市教育委員会では昭和56年5月21日府教委奥村技師の派遣を得て、付近の詳細な遺跡の分布調査を行ったところ、布目瓦片・須恵器片・陶磁器片等が丘陵末端部から台地部にかけて広範囲にわたって散乱していることが確認された。特に布目瓦は、遺跡の東端部の谷筋に集中的に散布しており、この斜面付近に瓦窯跡が存在するものと推測された。

その後、宅地開発に先立って遺跡地内を東西に横切る道路工事が実施されることとなったため、殖産住宅相互株式会社の委託を受け、宇治市教育委員会が主体となって事前の試掘調査を実施することとなった。

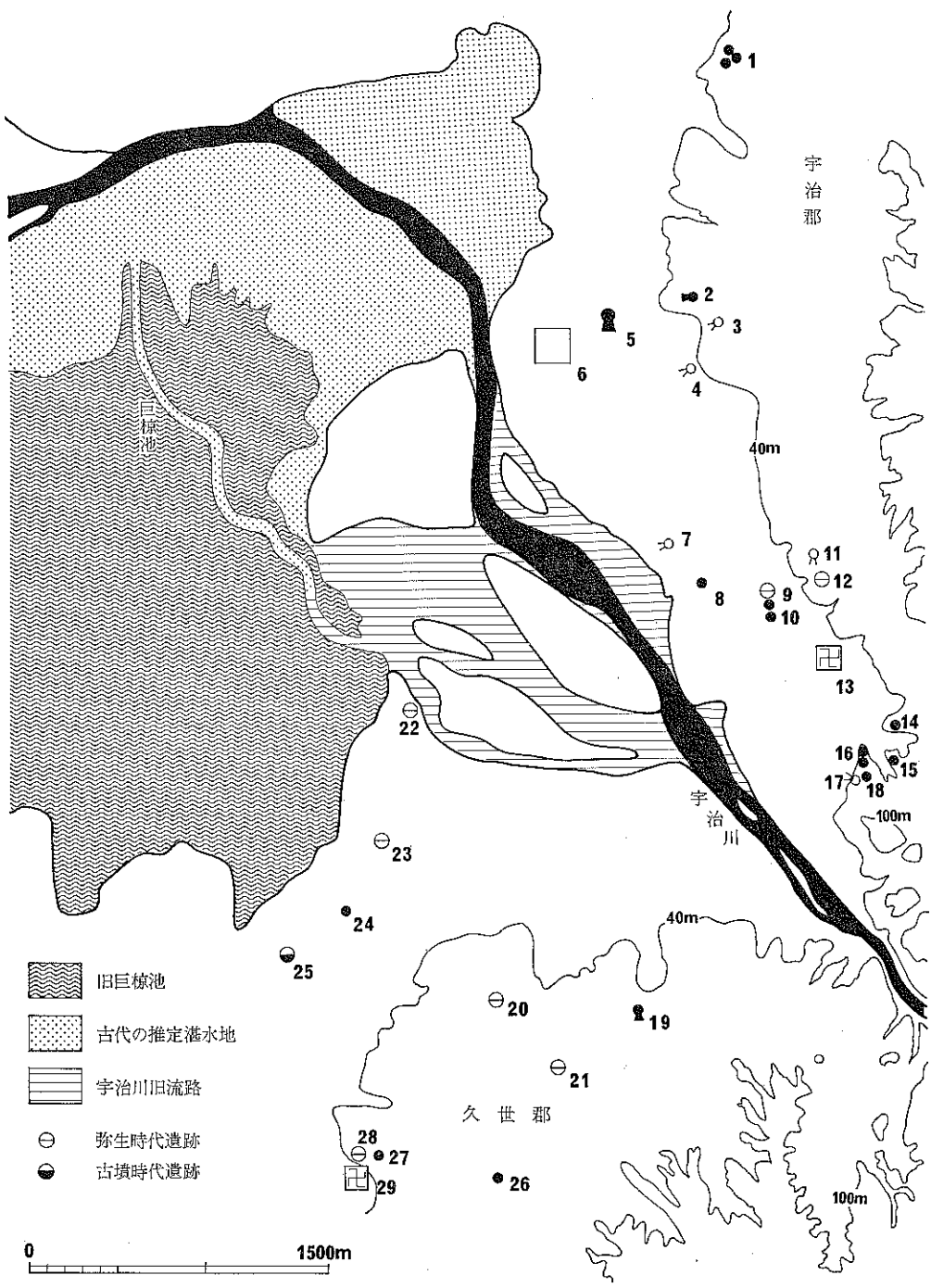
## 2. 位置と環境

隼上り遺跡は、宇治川東岸、宇治市菟道東隼上り他に所在する。かつて、弥生時代の石庖丁が出土したと伝えられるが、その詳細は不明のまま現在に至っている。遺跡の東方には、標高300m程の山塊がそびえ、西方に向かって50m前後の丘陵を派生している。今回の調査地は、この低丘陵末端のしかも小河川によって開析されたと考えられる谷中央部にあたる。

当遺跡の周辺は各時代に渡って遺跡が存在している。弥生時代には、隼上り遺跡の他、当遺跡と同時に京都府埋蔵文化財調査研究センターによって調査された羽戸山遺跡が東方低丘陵上にあり、弥生時代後期の堅穴住居跡1棟、土壇墓群等が発見され、南山城の高地集落に新たな一例を加えている。古墳時代においては、中期に現在の宇治橋東詰丘陵上に二子山古墳群が造られている。共に昭和43年に発掘調査が実施され、その内容が明らかになっている。北墳は直径40m、高さ4.5mの円墳で、墳丘裾に埴輪列をめぐらす。主体部は3基検出され、多数の鉄製武器・農工具や玉類・鏡類が発見されている。南墳は北墳に南接して築造されており、報告によると直径36m、高さ4.5mの円墳とされている。しかし、コンターラインの動きや、南・北墳接点部の北墳の埴輪の直線的な動きは、本墳が方墳である可能性を示しているように思われる。主体部は1基確認され、鏡・玉類・鉄製武



第16図 調査地位置図 (1:5000)



第17図 旧巨椋池周辺の主要遺跡分布図



番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	御蔵山古墳群	古墳時代	16	二子山古墳	古墳時代
2	木幡古墳群	古墳時代	17	宇治瓦窯跡	白鳳時代
3	南山窯跡	不明	18	古 墳	古墳時代
4	芝ノ東窯跡	不明	19	丸山古墳	古墳時代
5	二子塚古墳	古墳時代	20	神明遺跡	弥生時代
6	宇治郡衙推定地	奈良時代	21	野神遺跡	弥生時代
7	岡本瓦窯跡	奈良時代	22	巨椋神社東方遺跡	弥生時代
8	一里塚古墳	古墳時代	23	神楽田遺跡	弥生時代
9	隼上り遺跡	弥生時代	24	石のカラト古墳	古墳時代
10	隼上り古墳群	古墳時代	25	伊勢田神社遺跡	古墳時代
11	隼上り瓦窯跡	飛鳥時代	26	庵寺山古墳	古墳時代
12	羽戸山遺跡	弥生時代	27	一里山古墳	古墳時代
13	大鳳寺跡	白鳳時代	28	一里山遺跡	弥生時代
14	池山古墳	古墳時代	29	広野麿寺	白鳳時代
15	古 墳	古墳時代			

第1表 第17図付表

器・馬具・三環鈴等豊富な副葬品が出土している。この両墳は、当地方の首長墓として南墳から北墳へと継続的に築造されたものと考えられる。このような豊富な副葬品を持つ両墳が、前方後円形を採用しないことについては、当時期南山城地方に圧倒的強権を有していた久津川車塚古墳（全長 180 m）を盟主とする平川古墳群の被葬者にその規制を強いられた結果と考えられている。<sup>注4</sup>芭蕉塚古墳（全長 120 m）を最後として衰退する平川古墳群の強権没落後、忽然と全長 120 m の大前方後円墳宇治二子塚が宇治市五ヶ庄に出現する。隼上り遺跡の北西方約 2 km 地点である。当古墳の出現については、南山城地方も大きく、その渦中にまぎ込んだ継体天皇擁立の政争の結果とされるが、<sup>注5</sup>前にみた二子山古墳に表わされる内的な経済力を見過ぐすことはできない。後期古墳としては、今回の調査地に西接する隼上り 1・2 号墳等の径 20m 前後の小円墳が少数認められるだけで大きな古墳群を形成することはない。白鳳時代になると、当遺跡の南方約 400 m 地点に大鳳寺が創建される。当寺跡は昭和 46 年宇治市史編纂委員会によって一部発掘調査が実施され、塔跡と考えられる瓦積基壇が検出された。<sup>注6</sup>創建瓦は川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦のセットであるが、指標例より全体に平面的であり、やや型的に後出するものである。奈良時

代に一部瓦のさし換えがあったらしく東大寺式の軒丸瓦も少量出土している。この大鳳寺創建瓦については既に焼いた窯跡が明らかになっている。当寺跡南方約1km地点の二子山古墳群近隣の丘陵斜面に存在する宇治瓦窯<sup>注7</sup>がそれである。昭和6年に発掘調査が実施され、有階段式の登窯であることが確かめられている。このような単上り遺跡周辺の歴史的環境は、当遺跡所在の字名「菟道」が、現在は「トドウ」と読むが、もとは応神天皇皇子菟道稚郎子「ウジノワキノイラツコ」の「ウジ」を読みかえたものらしく、かつてはこの付近が、宇治（菟道）の中心部であったことを窺わしめる。

### 3. 調査の概要

調査地は、東から西に下がる緩傾斜面をなしており、そこに東から順に第1トレンチ(3m×20m)、第2トレンチ(2m×45m)、第3トレンチ(2m×30m)の計3本の試掘溝を設定し、調査に着手した。

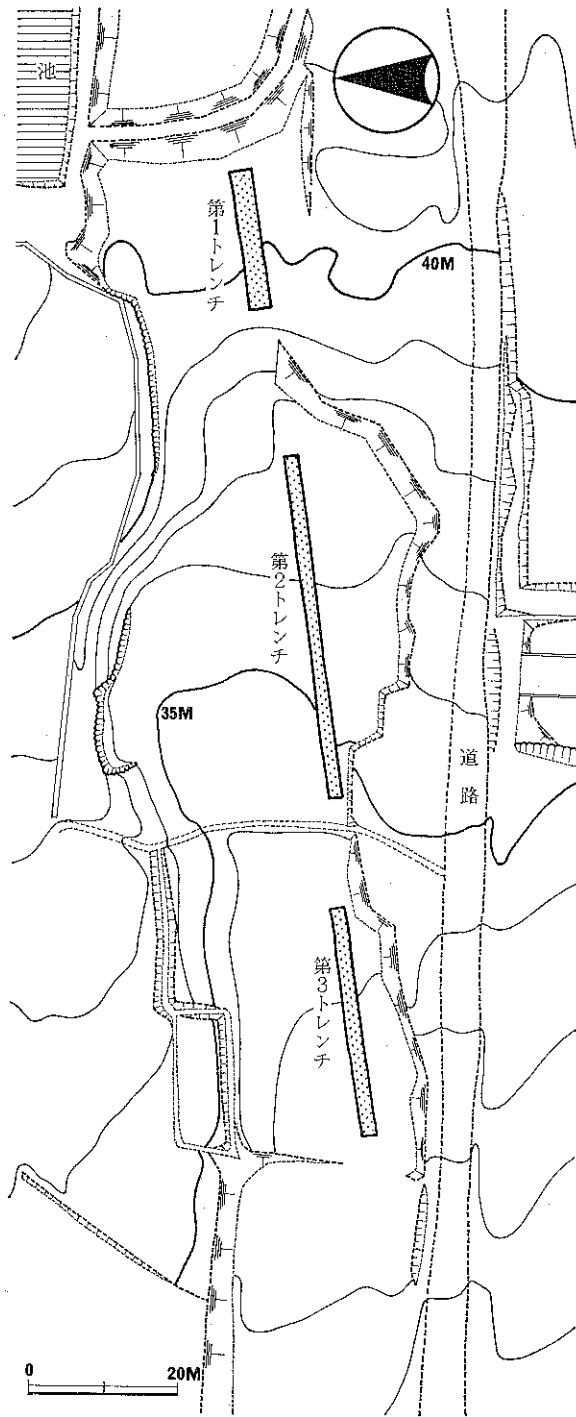
各トレンチの基本的な層位は、現表土下に厚さ約2mに及ぶ盛土層があり、それを除去すると旧表土が現われるが、この旧表土層も現代層である。旧表土下には、厚さ30cm～100cmの近世層である暗褐色土がある。第1トレンチでは、この層下の一部に灰層が厚さ40cm、長さ4m前後にわたり検出された。断面観察において確認された最下土層は、暗黄灰褐色土層であり、これも近世層である。第1トレンチにおいては、この層が現地表下2.5mの所で検出されている。この下層は暗褐色土層であり、この土も近世の堆積土である。以上の土層の中で、その堆積状況もしくは遺構より、遺構面を大きく2面確認できた。第1面は、暗黄灰褐色土層の上面であり、第2面はその下面である。共に近世以降の遺構面である。

各トレンチ概要は以下のとおりである。

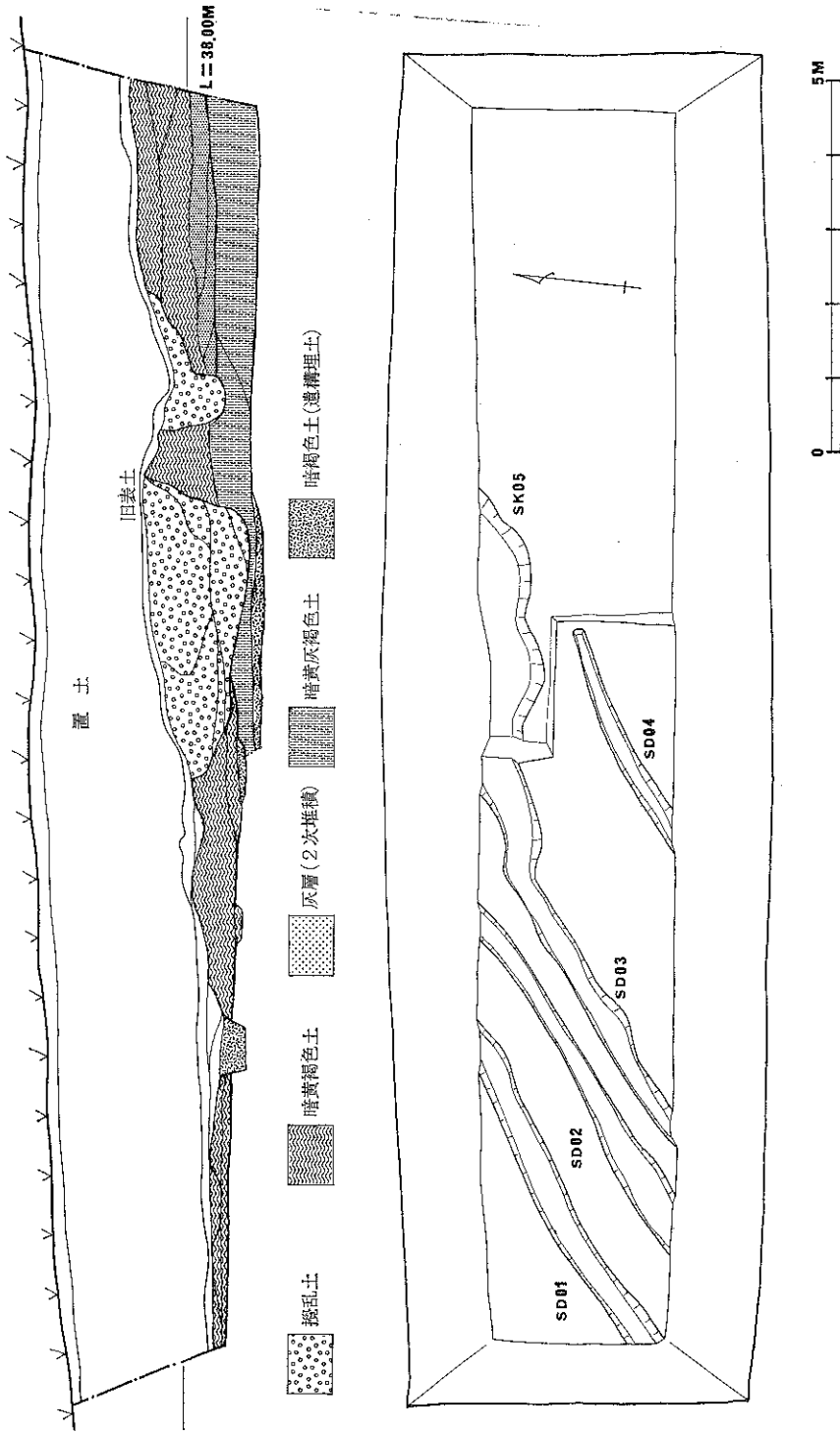
**第1トレンチ：**トレンチ東半部断面で、再堆積と考えられる灰層を確認した。遺構は、S D01からS D04までの溝状遺構と、S K05の不明土壇とがある。共に江戸時代以降である。

**第2トレンチ：**トレンチ東端部で江戸時代以降の溝状遺構・土壇等が検出された。

**第3トレンチ：**明確な遺構並びに良好な遺物包含層は検出されなかった。



第18図 トレンチ配置図



第19図 第1トレンチ平面・断面図

## 4. 遺物

土師器・須恵器・近世陶磁器・瓦等がコンテナに5箱分出土している。

### 1) 土器 (第20図)

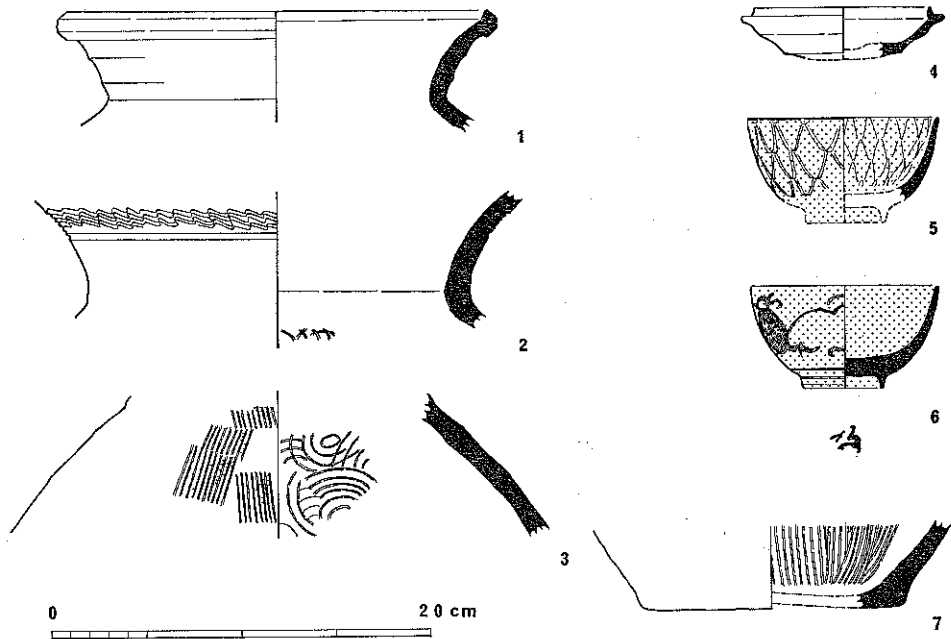
出土土器は、調査地そのものが各中央部であったということもあり、細片化かつ磨耗しているものが多い。ここに図化できたものは、その中の須恵器・近世陶磁器の一部である。

須恵器は器形的に杯(4)、甕(1~3)が認められる。特に杯は口径10cm前後の小型品であり、古墳時代の伝統的杯身の最終段階のものであり、陶邑Ⅱ型式第6段階に相当する<sup>注8</sup>。甕は、頸部に波状文を持つものと、ないものの2種があるが、共に共存するものであろう。

近世陶磁器は、伊万里系の碗(5,6)と陶磁のスリ鉢(1)とがある。古伊万里系の碗はともに染付が施されている。全体をおおう透明の釉は、共にやや青みがかった。

### 2) 瓦

磨滅がひどく、図化できるものはない。また瓦当文様も全く出土していない。平瓦は凸



第20図 土器実測図 須恵器(杯:4, 甕:1~3) 近世陶磁器(碗:5・6, スリ鉢:7)

面調整はすべてナデであり、タタキの凹凸を一切残さない。凹面は布目をそのまま残すもの、全面削るもの、横骨の凹凸のみ削るものの3種がある。丸瓦は、行基葺の破片は認められるが、玉縁はない。

## 5. ま と め

今回の調査では、調査地そのものが谷中央部という地理的条件もあって、当初予想された瓦生産に伴う工房跡・集落等の遺構は検出されなかったものの、第1トレンチに見る灰層や、瓦片・須恵器片の出土は、この谷奥部に瓦窯跡が存在することを裏付ける物的論拠となるものであり、今後その実相を究明しなければならない。また、近世、当調査地が水田であったことが花粉分析より指摘されている。分析報告を参照されたい。（杉本宏）

### 〔注〕

注1 田辺昭三「先土器から稲作へ」(『宇治市史』第1巻, 昭和48年)

注2 小山雅人「羽戸山遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 昭和57年)

注3 『宇治二子山古墳』(宇治市教育委員会, 昭和43年)

注4 『南山城の前方後円墳』(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告1』, 龍谷大学文学部考古学資料室, 昭和47年)

注5 同上

注6 山田良三「寺院の建立」(『宇治市史』第1巻, 昭和48年)

注7 柴田実「宇治古代登窯遺址」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』14, 昭和8年)

注8 田代克己・中村浩『陶邑Ⅲ』(『大阪府文化財調査報告書30』, (財)大阪文化財センター, 昭和53年)

補記 この調査で予想された瓦窯跡については、昭和57年1月18日より、同委員会により発掘調査が実施され、飛鳥時代の瓦窯跡3基と、それに伴う工房跡とが検出された。また、出土軒丸瓦より当瓦窯が豊浦寺創建に関わるものであることが確認された。

# 隼上り遺跡の花粉分析

## I はじめに

隼上り遺跡の発掘調査に際し、第1トレンチの溝状遺構のうちS D01南側面とS D02北側面の2ヶ所について花粉分析をおこなったのでその概要を報告する。

## II 分析処理法

試料約 200g を次のように処理し、花粉・孢子類を抽出、永久プレパラートを作った。

試料→ピロリン酸ナトリウム液で泥化→沈でん法による水洗→沈泥振動法による植物質の濃縮→塩化亜鉛飽和溶液による比重分離→水洗→氷酢酸処理→濃硫酸・無水酢酸の混液による処理→氷酢酸処理→水洗→グリセリンゼリーで封入→プレパラート仕上げ。

検鏡は 400 倍でおこなった。花粉については属ごとに計数した。イネ科については大きさ別に計数するようにした。

## III 結 果

両試料共に胞子がきわめて多く、ウラジオロ科・イノモトソウ科・ウラボシ科・ゼンマイ科等がみられる。その他不明のものも多い。それとは反対に花粉は少なく総数にして各試料共50に至らない。検出量は表のとおりである。

検出花粉実数

	S D01	S D02
マツ属 <i>Pinus</i>	24	29
ハンノキ属 <i>Alnus</i>	7	4
コナラ属 <i>Quercus</i>	3	1
クマシデ属 <i>Carpinus</i>	1	
ハツバミ属 <i>Corylus</i>		2
イネ科 <i>Gramineae</i>	5	4
ナデシコ科 <i>Caryophyllaceae</i>	2	
ヨモギ <i>Artemisia</i>	2	

S D01の遺構はマツ属が最も多く、次いでハンノキ属、コナラ属、クマシデ属がみられる。草本ではナデシコ科、ヨモギが検出された。S D02の遺構からは同じようにマツ属が最も多く、ハンノキ属、ハツバミ属、コナラ属がみられた。

イネ科花粉については孢子との区別がむつかしく明確にイネ科と同定されるものは表に示しただけである。大きさはほとんどが50~52ミクロンぐらいで、最も大きいので60ミクロンであった。またイネ科植物の葉身にある珪酸体のプラントオパールが検出されていてその形からはおそらくイネであろうと思われる。

#### Ⅳ ま と め

以上の資料をもとにして当時の自然景観を復元推定することはきわめて困難である。しかし検出された花粉・孢子がある以上それらの生育は否定できない。そういう観点にたっ  
てあえて考察を加えてみよう。

シダ植物の孢子が多く、草本花粉が少いということから、地表はシダ類優占の状態であったと考えられる。その上層にマツを主体としコナラ属やクマシデ属等の混生する松林があったのであろう。

次にイネ科花粉であるが、大きさだけでイネと断定することはきわめて危険である。しかし本分析においてはイネと断定しうるプラントオパールが検出されていて、しかも花粉の大きさが50~60ミクロンと現生イネ花粉の大きさと同じである。以上のことでイネの存在がいえるであろう。

すなわち本遺跡は水田で、周辺は地表にシダ類の生え茂る松林があったと考えられる。

(徳丸始朗)





## 6. 宇治市街遺跡立合調査概報

## 例 言

1. 本報告は、宇治市街遺跡立合調査概報である。
2. 調査は、昭和56年9月8日に実施した。
3. 立合調査の組織は、下記のとおりである。

調査主体 宇治市教育委員会

調査責任者 宇治市教育委員会教育長 依田孝一

調査指導者 京都府教育委員会文化財保護課技師 奥村清一郎

調査担当者 宇治市教育委員会社会教育課社会教育主事 吉水利明

調査協力者 梶崎彰一（名古屋大学教授）

赤沼多佳（東京国立博物館）

谷端昭夫（茶道総合資料館・財団法人裏千家今日庵）

若原英弍（京都府文化財保護指導委員）

森岡弥一郎，森岡茂，（森岡畳店）

4. 調査後の遺物整理・図面整理は、杉本宏（宇治市文化財調査員），志村みどり（龍谷大学卒業生）が行い，鈴木静恵，内海ハルエの協力を得た。なお遺物写真は高橋猪之介氏（元文部技官）の撮影による。

## 1. はじめに

旧宇治市街地は、史跡、名勝の平等院庭園を除き、周知の遺跡として京都府遺跡地図に登載されていないが、今回立合調査によって貴重な資料が得られたので報告したい。

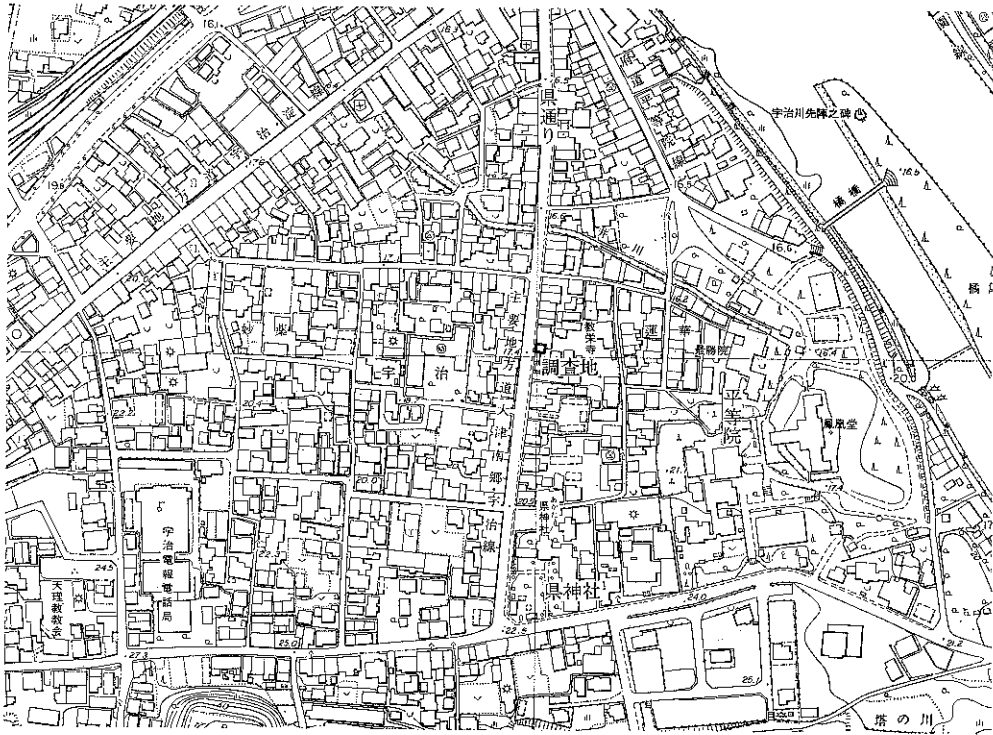
立合調査を行った宇治蓮華64番地は、旧平等院の寺域であり、平等院鳳凰堂の西約170m、県通り（大和大路）に面している。

宇治の市街地は、洪積段丘面から続く扇状地上に形成され、調査地は標高約20mで、南にあるかつて平等院の総鎮守としての県神社付近から、北にある宇治橋の方に向かって、ゆるやかに傾斜している。

昔の県通りは、現在よりも狭く、昭和7年に道を拡張する際に多くの古瓦が出土したと伝え、現在でも縄目の叩きをもつ平瓦片が表面採取できる所である。

立合面積は約56㎡である。

現地調査及びその後の遺物整理について、御協力、御指導を賜った多くの方々へ心より



第21図 調査地位置図 (1:5000)

感謝したい。

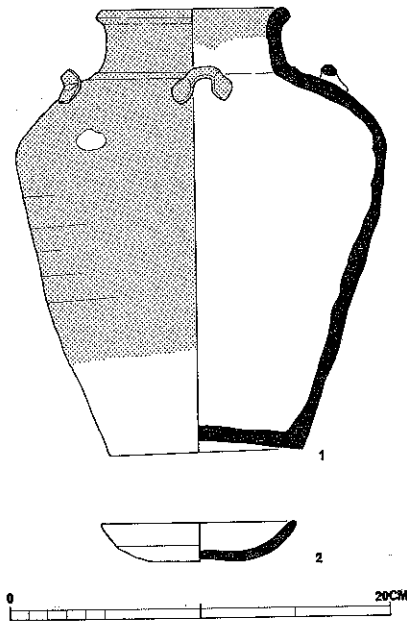
## 2. 調査の経過

県通りにおいて近々工事が実施される場所を注意していたところ、別件で当委員会へ派遣出張願った府教委文化財保護課奥村技師から、県神社の近くで掘削工事を行っているとの連絡をうけた。当委員会では、直ちに同技師を伴って現場にかけつけた。

現場に到着した時には、既に掘削工事の大半が終了していた。引きつづき、地主の森岡氏の了解を得て現場を調査した。掘削された断面を見る限り、表土から約1m下に沖積作用によって堆積した15~20cm大の川原石があり、この上層が遺物包含層であった。

次項で報告する四耳壺は、表土下約30cmの所から機械力で掘削中、偶然完形のまま出土したもので、我々が現場に到着した時には既に掘り上げられていたので出土状況等詳細は不明である。その他の出土物として、土師器、皿（平安後期~近世）、近世陶磁器片等がある。

今回の四耳壺等の出土により、旧宇治市街地の開発については十分注意を要することを痛感した。今後は、周知の遺跡—宇治市街地遺跡として、その周知徹底をはかり、より綿密な行政指導を推進して行いたい。（吉水利明）



第22図 土器実測図  
近世陶器（四耳壺：1）土師器（皿：2）

## 3. 鉄釉四耳壺

（巻頭図版，第22図）

出土した四耳壺は、口径10.0cm，器高25.5cmを測り，口縁部は玉縁状をなす。口縁部から体部下半まで，暗緑褐色の鉄釉が厚く塗られている。外面下半の鉄釉のかからない部分は一般的には露胎であるのだが，本品は透明釉をかけている所に大きな特色がある。外面肩部に2ヶ所の溶着痕（山ぎず）があり，所々に降灰の凹凸が見られる。

この鉄釉四耳壺は，ルソン壺を我国で模した

ものであり、所謂美濃系であろうと考えられる。年代も概ね17世紀初頭頃と推定<sup>注1</sup>できる。

本品がどのように使用されたかは不明であるが、当時の状況を考えると、茶壺として使用<sup>注2</sup>するため当地に運ばれた可能性が高いようである。 (杉本宏)

[注]

注1. 榑崎彰一氏御教示

注2. 若原英弑氏御教示



## 7. 宇治市街遺跡発掘調査概報



## 例 言

1. 本報告は、宇治市街遺跡発掘調査概報である。
2. 現地調査は、昭和56年9月25日から同年10月3日までである。
3. 発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査主体 宇治代官所跡遺跡発掘調査会

調査責任者 宇治代官所跡遺跡発掘調査会会長 依田孝一(宇治市教育委員会教育長)

調査担当者 宇治市教育委員会社会教育課社会教育主事 吉水利明

調査作業員 安堂市朗, 鈴木静恵, 内海ハルエ

調査事務局 宇治市教育委員会

教育次長 竹内禮三

社会教育課長 堀喜代蔵

社会教育係長 岡本茂樹

主査 伊藤忠正

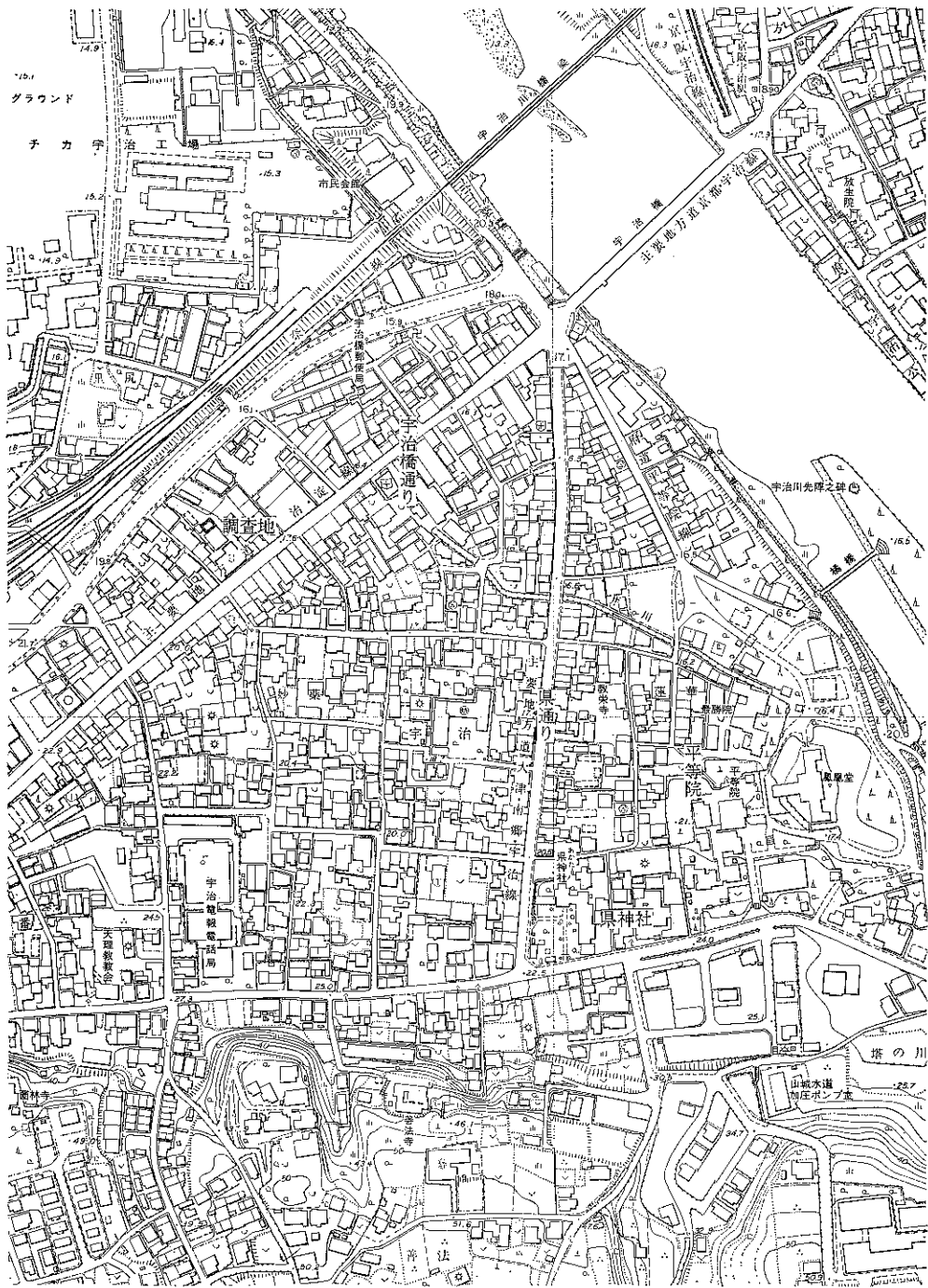
調査協力者 若原英弼・梅田正人(京都府文化財保護指導委員)

橋本久和(高槻市埋蔵文化財センター)

伊野近富(京都府埋蔵文化財調査研究センター)

株式会社京都銀行, 株式会社日建設計, 松村組

4. 調査後の遺物整理・図面整理は、杉本宏(宇治市文化財調査員)が担当し、志村みどり(龍谷大学卒業生)の協力を得た。
5. 調査を実施するに当たっては、京都府教育委員会文化財保護課 安藤信策・奥村清一郎の両氏から指導、助言を得た。
6. 遺物の写真撮影は高橋猪之助氏(元文部技官)に依頼した。



第23図 調査地位置図 (1:5000)

## 1. はじめに

京都銀行は宇治市宇治妙楽 160-1 番地において、宇治支店の増築工事を計画し、同計画に関する埋蔵文化財の問題について当委員会に協議を求めた。当委員会は、当該地は『京都府遺跡地図』（昭和47年刊）には遺跡の記載はないが、江戸時代の宇治郷代官所跡に相当するため、文化財保護法に基く所定の手続きをとるとともに、基礎掘削工事に伴う立合調査を実施する必要がある旨回答した。立合調査を9月22日に実施した結果、旧宇治市役所の鉄筋構造物によって大半が攪乱を受けていたが、その中で一部安定した層が確認できたので、府教委に連絡をとったところ、層位だけでも確認するようとの指示を受けた。

立合調査を終えようとした夕方に、攪乱層から棧瓦片が出土し、又比較的安定した遺物包含層を確認した。この中より完形にほぼ近い土師器皿を採取した。このため再度府教委へ連絡をとり、24日に安藤技師の派遣を得ることとなった。

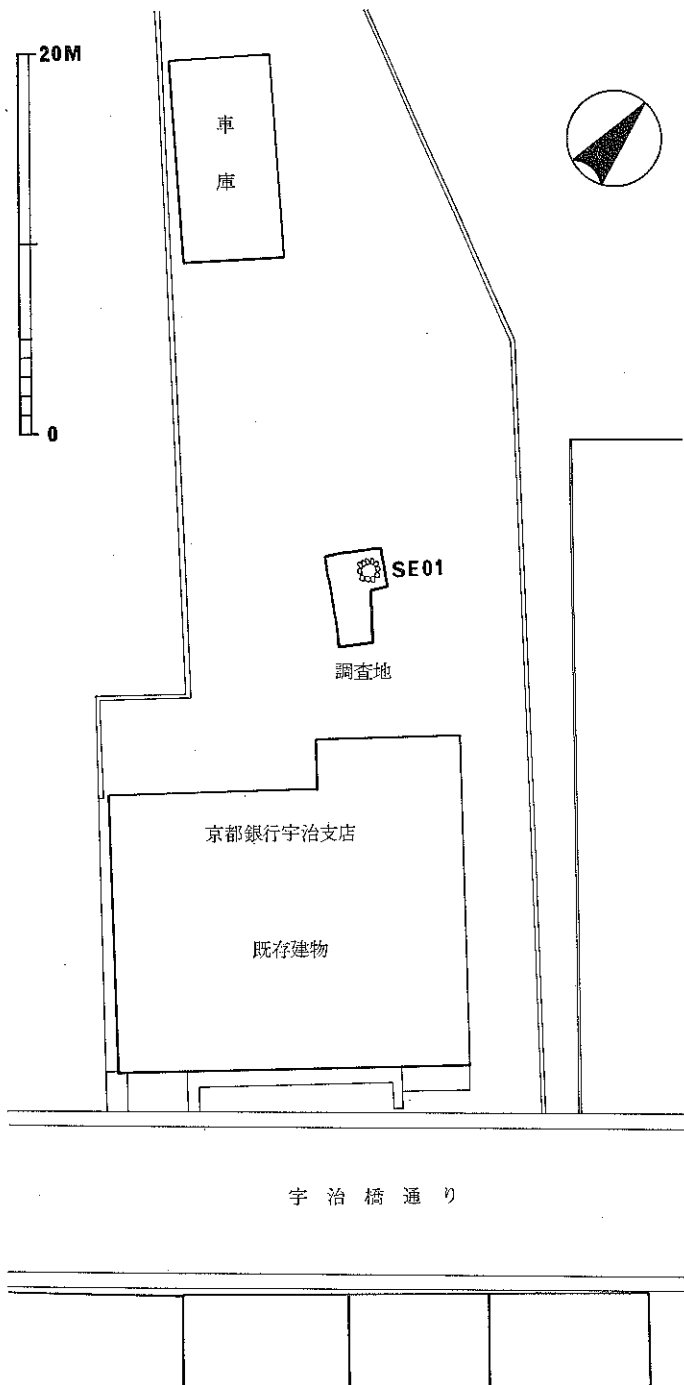
検討の結果、試掘調査の要がありとの指示を受けた。これにもとづき、当委員会では京都銀行ならびに日建設計と協議し、急遽試掘調査を実施することとなった。

現地調査は、宇治代官所跡遺跡発掘調査会が主体となり昭和56年9月25日に着手し、同年10月3日に終了した。現地調査及びその後の遺物整理について御協力、御指導を賜った多くの方々へ心より感謝したい。

## 2. 調査の経過

今回調査の対象となった地域は、新町通りに面する京都銀行宇治支店北側の駐車場である。『宇治市史』第3巻によれば、江戸時代に宇治郷代官所があった所とされている。試掘調査は、今回増築の行われる113.04㎡について実施することとした。

基礎掘削時の観察により、至る所で基礎鉄筋が残っているものの、一部に包含層及び整地層の遺存が認められることを確認した。試掘調査は、まず、遺構・遺物の状況を確認することを目的として、基礎鉄筋がされる位置に2m×5mのトレンチを設定した。人力によって表土（攪乱層）を除去したところ、トレンチ北側で現地地表下約50cmの深さで安定した層を確認した。しかしトレンチ南側では、基礎鉄筋のため地表下150cmまで攪乱を受けていた。北側を調査した結果、石列を検出し、さらに精査したところ、この石列は、石組井



第24図 トレンチ配置図

戸の一部であることを確認した。9月30日までに井戸を約半分調査し、内部から鎌倉時代に属する膨大な量にのぼる遺物を検出した。この時点で、当委員会では、遺跡の重要性を原因者に告げ、調査期間の延長を申し入れた。その結果、幸いにも京都銀行の理解と協力をうることができ、井戸全面を検出することができた。以上の経過を経て、10月3日に全ての調査工程を終了した。

### 3. 遺 構

調査面積12㎡程度という今回の発掘調査においては、住居等の広範囲を占める遺構の検出は状況的に無理であったが、はからずもその生活空間の一端を担う井戸跡が検出できた。以下その概略を記す。

**SE01** 現地地表下1.0mの所で、検出された円型石組井戸である。用材は人頭大の河原石でそれを小口積している。内径は1.0mを測り、深さ1.6m以上である。これは検出面より1.6m地点において大型石材が井戸内に崩落していたため、それ以下の調査が不可能になったことによる。しかし崩落石直下で、湧水が認められ井戸底までは至近であると考えられる。調査可能範囲内において、埋土が大きく3層に分層し得た。それぞれ上層、中層、下層として分層発掘を行った。それぞれの層内出土土器の概要は次項のとおりである。なお、崩落石の間より鹿角、木製箸、曲物底板等が出土した。 (吉水利明)

### 4. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土師器・瓦器・中世陶器・輸入磁器・近世陶磁器・瓦・金属器・木器・銭貨等である。時代は中世から現代に渡り、当地が連綿として利用され続けたことを示している。また、SE01からは、中世土器が良好な状態で一括出土しており、中世土器研究の基準資料となり得るものとする。

以下、まず器種別の分類・説明を行い、続いて遺構別の土器組成を概観する。

#### (1) 土 器

〔土師器〕 土師器は皿・高杯・羽釜等の器形があり、中でも皿は全出土遺物量中9割以上を占める。

皿：皿は各時代に渡り多量に出土しており、当時の日常雑品の中で一番使用頻度が高かったことを示している。また、その口縁部に油煤が付着しているものが幾点もあり、一部は燈明皿として使用されたい。

今回出土した皿は、その形態より5大別され、法量により更に大・中・小に細分される。Aは、口縁部を外反させ、更に端部を肥厚させる偏平な皿である。Bは、口縁部に2回の横ナデを施すことを特徴とするものである。Cは、内湾気味に立ち上がらせたものである。Dは、口縁部を内側に折り込む、コースター状のものである。Eは、端面を有すもので、口径も18cmと大きい。(26)しか認められない。

高杯：高杯というよりは、土師皿に脚台を付けた「脚付皿」の方が似つかわしいものが2種出土した。Aは、土師皿Dタイプに5cm前後の脚部を付すものである。Bは、土師皿Eタイプにやはり4cm前後の脚を付すものである。

羽釜：やや胴張りのする半球形体部を持つ甕の肩部に鐔を付すものである。口縁端部を内側に巻き込む特徴がある。大和地方に広く分布するものである。

〔瓦器〕 瓦器には碗・皿・羽釜の器形が認められる。出土個体数は、碗が10個体弱、皿が4個体、羽釜が2個体分と量的に乏しい。全出土量中の1%にも満たない量である。

碗：半球形の体部に、断面形状が逆三角形の高台を付すものが一般的であり、口縁端部内面に一条の沈線がめぐる。ミガキは、体部内面にのみ施されているものが多いが、一部には口縁部外面に散的に施されるものもある。内面見込みにラセン暗文を施す。口径14～15cm前後が多い。

皿：形態・調整とも土師皿Cタイプと似ている。口縁部内面には散的ではあるがミガキを施す。底部内面にジグザグ状の暗文を施す。口径9cm前後である。

羽釜：体部がやや内湾気味に立ち上がる半球状の鉢に鐔を付すものである。平安京内に通有な器形である。

〔輸入磁器〕 日宋貿易等の大陸との交易により我国に招来されたもので、白磁と青磁とがある。出土量は極めて少ない。器形的には、碗が主体であり他は合子のみである。

白磁：器形的には碗と合子身がある。碗は口径14～15cm前後であり、全形を窺えるものはない。体部内面にヘラもしくは櫛状工具で文様を施す。合子身は口径5cm前後、器高2cm程の小さなもので、受部下に花卉様の陽刻がある。

青磁：器形としては碗のみ確認できた。全形を窺えるものはない。体部内面にはヘラもしくは櫛状工具で文様を施す。また外面にも、同様に文様を施すものもある。釉色は、濃

緑色から淡青色まであり、一様でない。

〔中世陶器〕 所謂六古窯の成立後、それらの窯業地で生産された陶器である。器形的には、大甕・鉢等が見受けられるが、ごく少量である。大甕は、口径34cm程のもので、常滑窯製品かと考えられる。

〔近世陶磁器〕 江戸期全般に渡る陶磁器が出土している。染付だけのもの、赤色顔料等で着色しているもの等多種多様である。これらが基本的に宇治代官所に関する遺物であろうが、今回その一部を図示するにとどめる。

## (2) 瓦

包含層中より非常に多量の瓦片が出土した。しかしその大半は、所謂棧瓦であり、これについては割愛する。棧瓦以外の木瓦葺に使用するものについては、丸瓦完形1点・平瓦片3点である。共に凸面に縄目叩きが、凹面に布目が認められる。S E 01出土。

## (3) 金属器

金属製品としては、鉄製の鍛造角釘片・銅製の刀の鞘金具の一部かと思われる板状不明品・銭貨がある。銭貨は「寛永通宝」である。包含層出土。

## (4) 木器

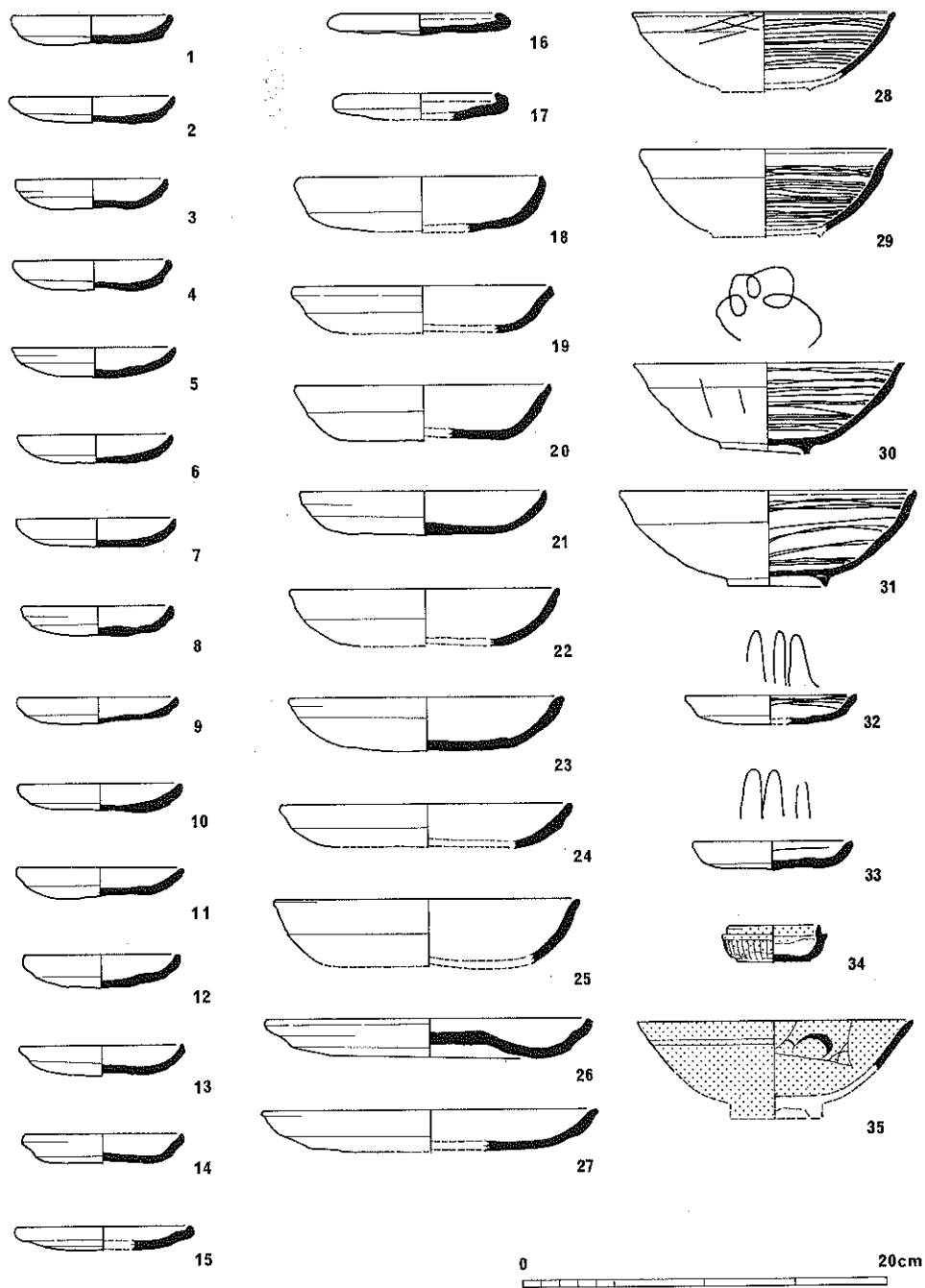
一般的に火を受け炭化していたためか、少量ではあるが木器が遺存していた。柱・板材等の建築部材が大半であり、その多くが、江戸期と考えられるものである。S E 01内より長さ25cm前後と推定できる両尖の木製箸が十数本出土している。

## (5) 遺構出土の土器

### S E 01出土土器 (第25・26図)

S E 01内における上・中・下の3層が、その完掘による分層ではないことは既に述べたとおりであり、かつ整理作業の中で、この各層がそれぞれ大きな時間経過の中で形成されたものでないことを確認したが、一応各層ごとにその内容を説明することとする。

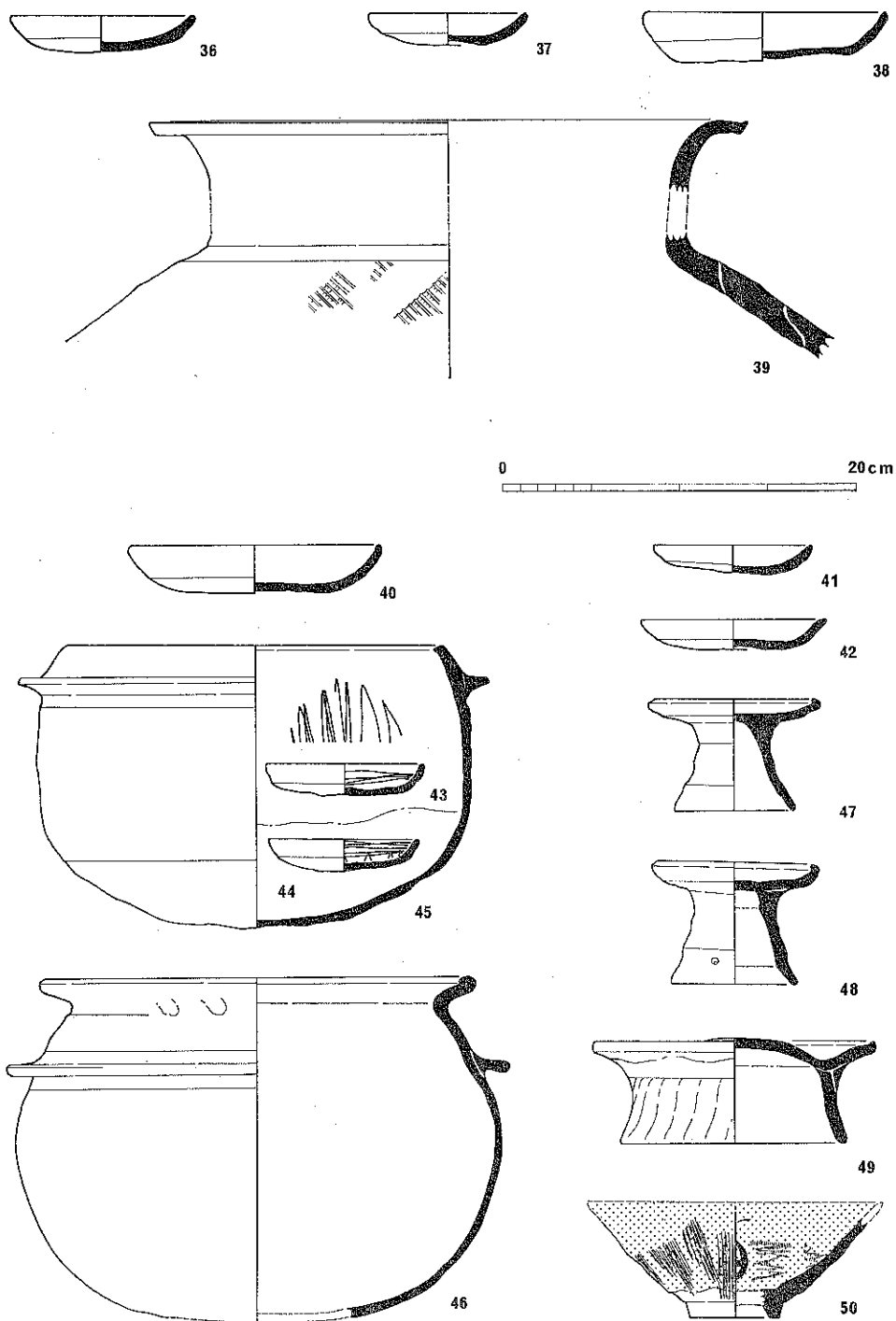
上層出土土器は、土師皿を主体に若干の瓦器碗・皿等が伴う。量的には、他層をしのぎコンテナ4箱程出土している。土師皿は、口径9cm前後・器高1.5cm程のCタイプの小皿がその主要形式である。口縁端部をやや上方につまみ上げ状にするもの(1・3・5・11・



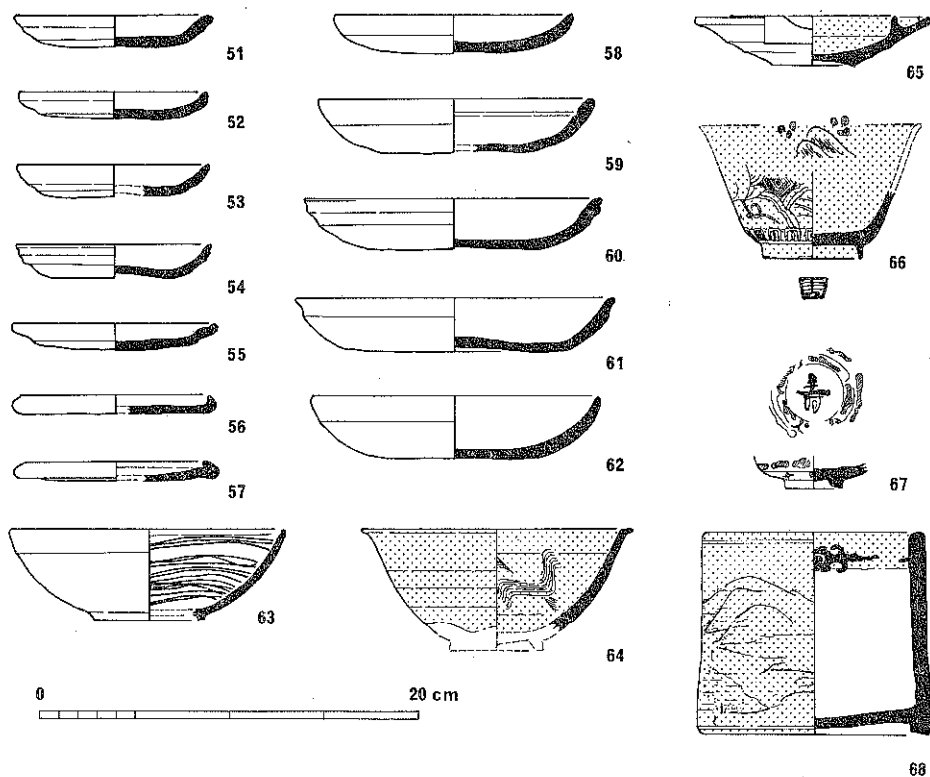
第25図 SE01上層土器実測図

土師器(皿A:15,皿C:1~14·18~24·27,皿D:16·17,皿E:26)瓦  
器(椀:26~31,皿:32·33)輸入磁器(白磁合子身:34,青磁碗:35)





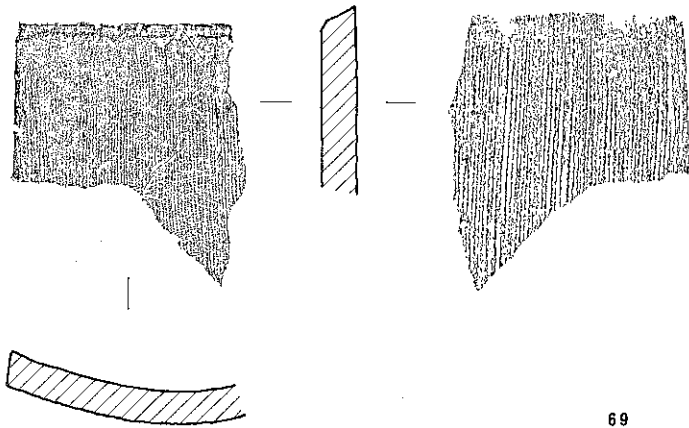
第26図 SE01中・下層土器実測図  
 中層36~39土師器(皿C:36~38) 中世陶器(大甕:39)  
 下層40~50土師器(皿C:40~42, 高杯:47~49, 羽釜:46)  
 瓦器(皿:43·44, 羽釜:45) 輸入陶磁器(青磁碗:50)



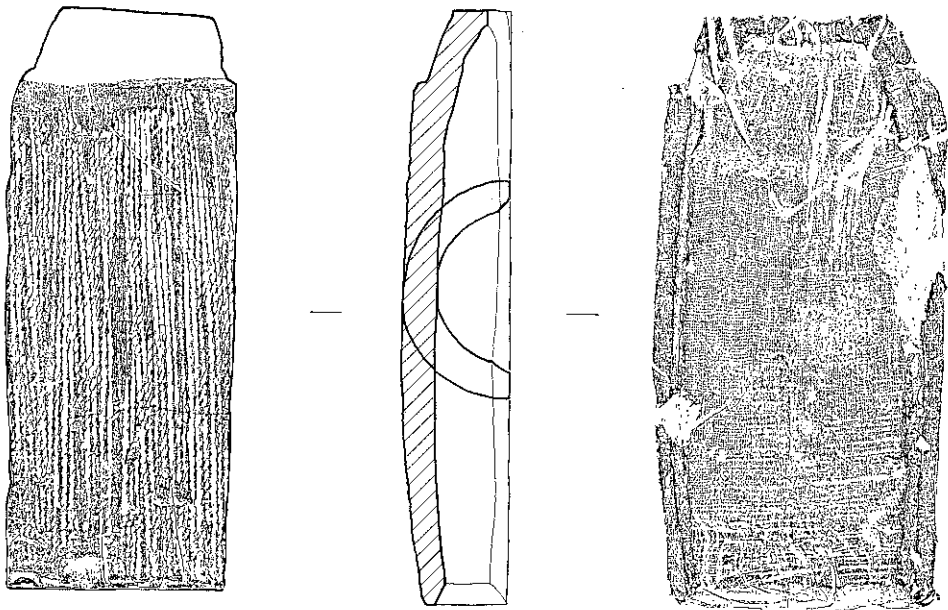
第27図 包含層土器実測図

包含層51~68土師器（皿A:55,皿B:51~54・60,皿C:58・59・61・62,皿D:56・57）瓦器（椀:63）輸入磁器（白磁碗:64）近世陶磁器（燈明皿:65,碗:66・67,古伊万里:68）

14) と、丸くおさめるもの（2・4・6~10）とがあるが、両者の間に法量上の差はない。量的にも相半ばする。他の小皿としては、A（15）が1点・Dが数点ある。両者の総数の土師皿内における比は1%を超えない。（15）はAタイプの中でも形式的にかなり退化したもので、厚手化し鈍重な感じがする。平安京内膳町S D 345 下層出土例<sup>注1</sup>と類似する。口径15cm前後、器高3cm程の中皿においてはCタイプのみであるが、これも小皿同様口縁端部をつまみ上げ状にするもの（18~21）と、丸くおさめるもの（22~25）の2者が認められる。しかし前者が口径・器高ともかなり規格化されているのに比べ、後者はそれぞれバラ付きが認められ、相互の形状外の相異点となっている。（26・27）は共に口径18cm前後の大皿で、（26）がEタイプ、（27）がCタイプである。それぞれこの1点のみ。瓦器には皿が認められる。椀は（28）以外はすべて内面のみをヘラミガキするもので、それもやや粗い。高台は（30・31）に見られるごとく、断面逆三角形形状を呈しており、安定度もさほどよくない。（29）が大和型と考えられる以外、他は樟葉型<sup>注2</sup>である。皿は基本的には土師



69



70

第28図 瓦実測図（平瓦:69, 丸瓦:70）

小皿Cタイプと同様の形状をしている。共に口縁内面に粗いヘラミガキを施す。底部内面には、ジグザグ状の暗文を有す。輸入磁器には白磁合子身（34）と青磁碗（35）とがある。

中層出土土器は、総数が少なく、必ずしも良好な資料になるとは言えない。器形的には

他層と同様、土師小皿Cタイプがその主体である。口径・器高とも上層出土例と同じである。他器形としては、常滑の大甕(39)と大平鉢の体部片とがある。(39)は、かなり外反する口縁部を持つもので、体部外面には平行タタキが残る。

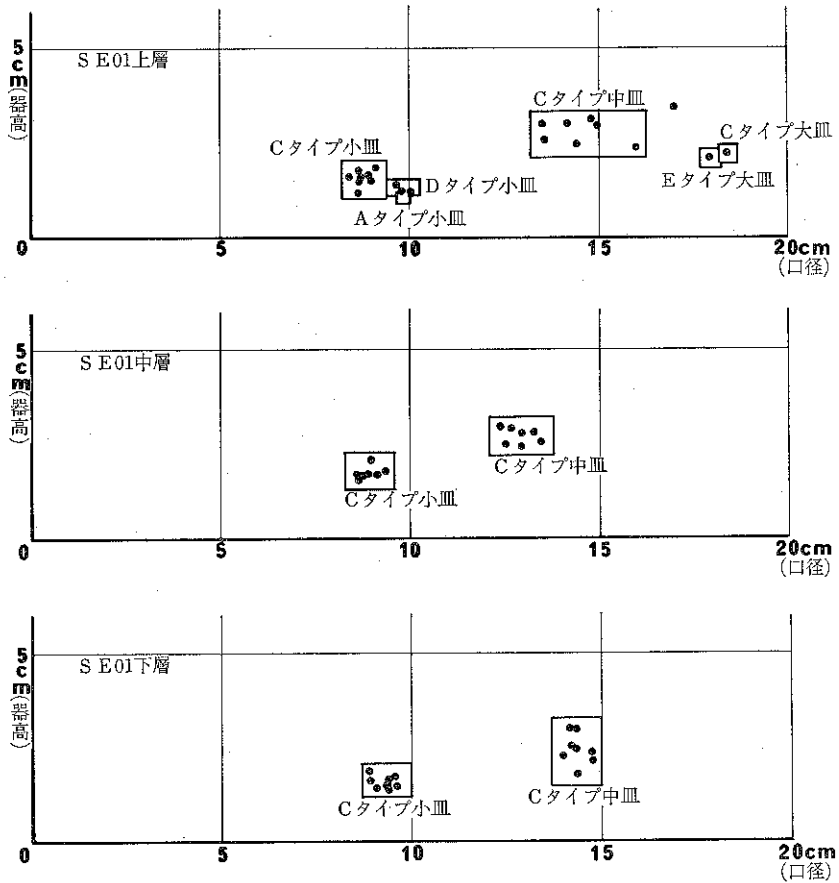
下層出土土器は、他2層より器種・器形的に豊富であるが、その主体はやはり土師小皿Cタイプである。口径が他のものより総体的に若干大きいようであるが、他器形の比較よりそれがそのまま時間差を示すものとは考えにくい。土師器としては、他に高杯(47~49)、羽釜(46)がある。高杯は杯部が土師小皿Dタイプ様のもの(47・48)と土器大皿Eタイプ(49)とがある。前者の脚部は口径に比べ、比較的高く、背高の感を抱き、後者とは対照的である。また(48)には、脚部裾に焼成後穿孔が一孔ある。(46)は大和型の羽釜である。外面下半は、火を非常に良く受けており、器壁の剝離現象が認められる。他に1個体分、認められる。瓦器は、皿(43・44)と羽釜(45)とがあるのみである。皿は上層出土例と同型である。(45)は、平安京内で通有に認められるものである。外面に煤が厚く付着している。(50)は輸入磁器青磁碗である。内面にヘラによる陰刻と櫛状工具による所謂「ネコカキ」が認められる。外面には規則的に、6条1単位の条痕が施されている。釉色は濃緑色であり、厚くかけられている。同安窯系青磁碗Ⅲ類であろう<sup>注3</sup>。

以上、各層の出土土器を概観したが、前述したとおり、各層間に土器の型式差は見い出せず、SE01内一括として取り扱ってよさそうである。このような組成土器群は、他に平安京内膳町SD345上層等<sup>注4</sup>があり年代も概ね13世紀初頭頃と考えられる。

#### 包含層出土土器(第27図)

前述したとおり、層位的には数層認められたわけであるが、層位的分別が調査時において不可能な状況であったので、SE01以外出土品はすべて包含層出土品として取り扱う。

土器の主体はやはり土師皿でありA~Eの各タイプがある。(55)は、小皿Aタイプであり、その中でも後出的なものである。(51・54・60)は口縁部に二段ナデを施すBタイプ、(52・58・59・61・62)はCタイプ、(56・57)はDタイプである。(63)は瓦器碗であるが、内面のみにかへラミガキが施されておらず、SE01出土例と同時期のものと考えられる。(64)は白磁碗である。体部外面下半には釉下に回転ヘラケズリを施す。内面には8条1単位の波状の文様を施す。(65~68)は近世陶磁器である。(65)は燈明に用いる皿で、口縁部に油煤の付着が認められる。京焼であろう。(66・67)は碗であるが、体部外面及び、内底面に青・赤色で彩色文様を持つ。産地不明。(68)は、古伊万里であろうと考えられる。外面には、山水画の染付を施す。



第29図 S E01土師皿器高・口径指数図

## 5. ま と め

現在の宇治市街が町家として成立してくるのは、11世紀、時の権門藤原氏がこの地に別業を営み始めたことによるとされる。源融の宇治院を藤原道長がゆずり受け、永承七年(1052)に、その子頼道が、末法思想下に現世の極楽として現出させた平等院は、その代表的存在であり、今でもその優雅な姿は見る人の目を楽しませる。この平等院の周囲には他にも、藤原師実の宇治泉殿、頼道の娘寛子の池殿法生院、藤原忠実・頼長の小松殿成楽院・西殿等があり、これら別業周囲に成立した民家と、大化二年(646)銘の宇治橋断碑に現わされるがごとく、その渡河集落とが複合し、一つの町家を成立していったと考えられている。<sup>注5</sup>このようにして出来上がってきた集落も、その後源平の争乱の有名な「宇治川先

陣争い」に象徴されるごとく、交通の要所の常として近世に至るまで、幾多の兵火により焼失してきており、また近世以降も失火等による大火がたびたび記録されている。今回の調査において確認された焼土層も、それぞれこのような記録に残された大火により形成されたものであったことは、充分予想されるし、またその存在によりこの火災層を一つの鍵層にすることで、遺構の絶対年代を推し得る基準とすることも可能であろう。今回の調査においては、残念ながらそれぞれの火災層の時期を同定することは不可能であったが、足下の古代～近世に至る町家跡が想像以上に良好に遺存している事を確認し、今後の宇治町家変遷の追究に一つの方向付けをしたものとして大きな意義があったと考える。(杉本宏)

〔注〕

- 注1. 平良泰久・伊野近富「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会，昭和55年）
- 注2. 橋本久和氏の御教示による。
- 注3. 横田賢二郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」（『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館，昭和53年）
- 注4. 注1.に同じ。
- 注5. 「京都府の地名」（『日本歴史地名大系』26平凡社，昭和56年）

